主幹・麻生路郎

川柳雜誌

七月號

大正十三年三月二日第三種郵便物認可
昭和六年七月一日發行（毎月一回一日發行）

第八卷 第七號

川柳雜誌社發行

川柳雜誌第八卷第七號目次

文苑

柳の絮(四)　長野吉高(一九)
名句觸感　阿部閑生(二四)
傍註　松丘町二(七)
川柳辭典を讀む　森東魚(三六)
書名讀込の古川柳(二)　竹馬居主人(二九)
川柳修業記(二)　句箋子(四六)
かほるさんにお逢ひして　酒井啞聲(四九)
月評　作家展望　路郎、ひろし、琴人、素人、町二、(三)

地下鐵

鼻茸を切る　庄萬よし(一〇)
酒場琴人(二三)
或る貞操帶　伊藤愚陀(二三)
街に住めば(五)　高橋かほる(一五)
街頭偶語　三好革郎(一五)
醫者二題　沙門釋子(一六)
選手權の提唱　櫻井圓角(一八)
海士に就て　森東魚(三五)

一路集(募集句)

蠅　麻生葭乃選(四〇)
糸　高橋かほる選(四二)
屑　中見光路共選(四二)
職人　木村晃卓共選(四二)
本社六月例會　朝田新水記(五一)
續川柳家戸籍調　福田山雨樓(四〇)
杭全町MEMO　橋本綠雨(四二)
編輯室から　(六三)

創作

作塔　麻生路郎(一)……(四)
川柳　近作

○

杏琴人　三町二
一徹鐵洲　山雨樓
柳路雅幽　愚陀亂耽
かほる綠雨　萬よし　新水

◇

靈壺　二南
桂枝　閑生
春秋　奈緒美
圓角　京郎
悟郎　晃卓
雪峰　丹路
蒼太　明珠
鶴峯　觀月
計加　鮎美
夏曉　夢裡
濁水　綠之助
一杉　豆秋
帥樂

粒々集……(三八)

長崎　柳秀　前田　五健
富士野鞍馬

光耀抄　麻生葭乃選(三四)
近作柳樽　麻生路郎選(一〇)
同　安井ひろし選(二六)
各地柳壇……(四六)
表紙

七月例會

▼日時　七月五日午後六時半(日)
▼場所　南區清水町電停西入北側端の坊
▼兼題　「匙」　三句
▼會費　二十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

近作

麻生路郎

死は強しもう女中ではありませぬ

火遊びを亭主疑ひはじめたり

くされ縁だミは女のづうづうし

戀の罠あの眼だらうか眼だらうか

妬かれてたそのころは未だ金もあり

晝寢から海岸線がのびてゆく

川柳塔

○　安西杏三

こぼ〳〵と我がなきがらを引いて行く
纏りのない風景に子を連れて
この町をみだらに女給風呂へ行く
巡禮に訊けば七人子を亡くし
何時妥協出來たかビール冷やして居

○　松盛琴人

不況を嘆く或るレストランにて

商賣氣出してヒロインやつれたり
ごうおしやすのえ丸山の影朧

○　松丘町二

帽子脱げば顔の埃が落つるなり
不甲斐なさのいやまさりゆく酒にして
日ざかりの匂をさせて妻歸り

○　福田山雨樓

布裁つた母は思案の灯を浴びて
汽車ほどにひた寄る戀に夕月の
座つてる僕が正直すぎるのだ
自動車のブールンペンをつきのける
妻叱る聲も鋭く年をとり

○　長谷川一徹

バスガール模範と云ふが老けて行く
醸される迄待て君は君の途
セービングさても狙上のものなるぞ

○　中島鐵洲

彼不惑自制もなくて灯をくゞり

市議戰裏面

買收に自尊の髭のあはれなり

○　伊藤愚陀

街の子が嫁入の自動車に立つたまんま
共同便所へ性慾的な陽が這ひ込んだ

○　住田亂耿

かつて戀知らずと言ひし妻いとし
街に住む友の眼鏡の泛び來る

○　岩崎柳路

今置いたジェリーケーキの顔へて居
支那服の第三夫人犬を連れ

○　關本雅幽

自惚れを明日へ明日へと捨てませう
ネオンねぼけて詩人の靴の先
上等兵で戻り要領よく生活し
プラタナス一人は上着肩に掛け

○　庄万よし

特高に戰旗改造資本論
警察の立塲てつぺんからの聲
戰術の一つ檢束されて行き
女學校父を呼ぶ日が稀になり

○　朝田新水

世智辛さ忘れようとて泪ぐみ
延ばす手に染みつきそうな海の宿
愛するこ云ふ言葉さへ許されず

○　高橋かほる

手を焙りながら博士は年を聞き
交番の椅子へ迷子は腰を掛け
掛け取りを待たして男物を縫ひ
友達を待たして五百番で聞き

○　橋本綠雨

質札がどんなものかこのぞきこみ
遺言の寄附に少々不平が出

◇　片桐靈雷

聖歌隊から一人減り二人減り
憂鬱を捨てに遊びに來るマダム
何せもう貴方は男猫なのよ
南風姉は彼氏を迎ひに出
社員級溝の鼠にさも似たる
會へば直ぐチヤールストンになる脚よ
マダムちこ甘へる身振りして買はせ
可愛さはパン頰ばつたまゝねむり
無憂華を振けばケースの輕さなり

◇　中野裸人

重さうに辭典をさげてはいつて來
女中からお金を借つて叱られる
ごこもかも内入りにして呑んでゐる
桃割れに結はして店の方へ出し
長煙管さげて板塲は寢に上り
若夫婦を殘して襖しめて行き
新聞を讀んで惡友待つてゐる

◇　楊井二南

出雲屋へ傘のあるのは寄つて行き

東西松竹合併記念興行

中座から當選洩れを刷つて來る

旅先の父へ

麻雀を支那の旅館へ頼んごき
詫狀を出す氣が既に他人じみ
虚無僧の畫はガラスに映るだけ
呑まなけりや出世の出來ぬやうに云ひ

◇　阿部閑生

斷りしまゝ絶えて來ぬ男はも
雷電のその時呱々の聲をあげ
羅の乳房は何處にひそむらん
自らを疎みそめてや宵寢なご

◇　岡崎桂枝

能率が何のこ課長碁にふけり
口紅に眞赤な嘘をつかれたり
きつこ來て呉れこ例のが云ふて居た
思ひ切り姉もかばけた夏の川
令嬢に今宵思はぬ酌をされ
極道も親へ輸血の腕を出し

新聞の受賣聞いて亦酌がれ

◇　喜多春秋

書きぼくろ女心はこんなもの
合槌こ肩を並べて辻を折れ
白い足袋はいて天下を狙ふ奴

◇　茨木奈緒美

失業者ハンマにおさへられた夢
占は吉女出かけてゆくらしい
夢多き男へ花のちりかゝり

◇　桑原京郎

枕するほかに淨土の見あたらず
「天の邪鬼」！さうですかこも云ふこれず

◇　櫻井圓角

主義も主義だが腹減つて來た
親が死に姉妹が嫁き夏が來た

◇　北山悟郎

妻の里もう客人にしておかず
身重の妻にこれも言ふまい

◇　木村晃卓

淋しさはたゞよい時の友ばかり
母の顔妻の顔死ぬ氣もにぶり

懸取りのくせに大きな聲を出し
安靜の蒲團の中でかぜを引き
見返してやらうも今は金がなし

◇　山本丹路

寢汗かくよな御身分でして
こんな世帶に切花なんぞ買ふて來て

◇　池田雪峰

姉さんが日に〳〵痩せて神々し
友の死に接して
マルクスもクロポトキンも友も逝き

◇　平井蒼大

入院
こつぼりとベッドに沈みし大きさよ
恩情に泣く子となりしあざけらん

◇　西村明珠

田に水が足らぬといふて金貸せか
スックと立ちし借金のない男
死に絶えて今に時計も止るだらう
ほめられて小供何處かへ消えちまひ
女中まだ並らんで歩るくのがこはひ

◇　川村觀月

夕立の如き男であれよかし
つまらないことに善人笑ひたり

◇　福田鶴峯

田を植へる如く世間が運べたら
團体を離れて獨り本を讀む

◇　三好計加

ステッキで蛙つゝいてみたりする
クレオンで硝子戸無茶に描かれてる
グランドの五月轉んで競技見る
どうしたことか度々蛇に出あふ日だ

◇　水谷鮎美

戀のひま臥てゐて雨の美しさ
宿替を見てゐる雀囀るよ
金力へ職業的に笑ひたり

飛白着て袴をはいて遊に出

◇　村松夢裡

言譯も言へず矢張り馘首だつた
物干しの蹴出しの色の淫らなる
商賣が下手と云はれてまけて行き

◇　三輪夏曉

もごかしくなれば振られたことにする
夏服を着ればやつれが目立つなり
おし圖りおし圖られてゐる若さ

◇　中澤濁水

減俸へまた仲居來る俸給日
蓄めてゐる高を訊かれて話し替へ
二つ要るなごゝ夏帽買いやめる
エロとグロ美人小路を更けさせる

◇　伊藤綠之助

結婚（三句）

この結婚に何をさぐらむ
結婚よそは一ページでは餘ろ
妻よ妻よ消ゆる青春ではあらず

◇　須崎豆秋

タクシーに乘るよな顔と見えるかい
ガソリンをエロな角度でついでやり

◇　西田艸樂

エレベーター抱いてる樣に寄り添はれ

須磨行

煙突男見える見えると汽車の窓
金持の理屈シャニムニ押通し
神樣があろがなかろが道一つ

◇　阿形一杉

身を崩すほどの甲斐性うらやまし
隔日に柱時計を卷く非番
夏服に忘れてもよい折鞄
巨細なく云へば女は淋しがり

傍註

松丘町二

久し振りの雨を見ながらぼんやりしてゐたらA氏がやつてきて、君の書くやうな作家論は誰にでも書けるよ、といつた。A氏は僕の友人である。僕はびつくりして平凡な事實を語るといふことは複雜な理論を語るより遙かに難かしいことだよ、と答へてやつた。『誰にでも書けるやうなことを書くといふことは一番難かしいことだ。少くとも勇氣がいるからね』『一體男氣とは』と彼氏も負けてゐない。『空々しいとか可憐なとかいふ要素を取除けたら凡そ意味を失ふ怨の言葉に過ぎないぢやないか。君の書く作家論が勇氣以上に出ない所以さ』『だが僕ももういゝ加減にして引へむさ。若いくせに説教して得々としてるなんていふお節介な鍛睨みは平氣で彈き返してやれるが、實は僕、妙な話だが赤子の泣聲をきいてゐてね。人間——ここに自分つてものがいやになつた』『自己否定？それもよからう。だが自己否定が自己破壞に逃れないところに生の深さがあるつてことを忘れなさんな』とA氏は珍らしく眞劍な顏つきで云つてくれた。

『川柳は人生の記錄であり、世相の描寫であり、社會の批判であり、哲學であり、宗教であり、作家の魂の反映である』とは塚越迷亭氏が下した川柳の定義である。此字面の呈する美事さは凡そ類がない。だが美事であればあるだけこの言葉は疑問符の連りと私には見える。借問す、では川柳以外の他の文學は何であるのか？川柳は果して人生の記錄と云ひ得るか。世相の描寫とすれば餘りにお粗末過ぎはしないか。川柳の社會批判性とは、そも〳〵如何なる意味合のものであるか。川柳によつて批判されるほどしかくこの世は單純であるか。川柳の哲學とは何か。宗教であり魂の反映であるとすれば、この哲學は觀念論的哲學であるか。そも〳〵川柳が宗教であるとは、宗教の阿片性が川柳がある種の川柳家の觀念に與へる阿片性と相通するといふ次第なのか。こんな風に云へば身も蓋もなくなつてしまふ。だが川柳とはこの身も蓋もないところから始められる筋

合のものではないだらうか。迷亭氏の言葉はこゝに於て初めて正當に私を動かす。迷亭氏は云つてゐるのだ。川柳に定義はない。と。

さゝやかな美を歌ひ、吐息を歌ふ。由來短詩とはその程度のものだ。と世間では思つてゐる。だから輕蔑していゝといふ理由はいさゝかもないのだが、世間といふ奴は兎角鼻であしらひたがる。成程いかに立派な川柳を讀んでも、一篇のすぐれた小說乃至は評論かゝ受けると同じ量の感動は受けぬ。いかに川柳が人生の記錄であり社會の批判であり哲學であつても、例へば『罪と罰』と同列にあり、近世唯物論の壘を摩するものだなどゝは云へぬ。では何故我々は川柳を愛し川柳作家であることに誇を感じて制作に努力してゐるのか。それは君に小說が書けず評論が書けぬからだ、との毒舌は否定する理由もないが、少くとも私にとつては川柳が短詩のうちで最も人間に近いからだ。人間の理論や感情に近いのではない。人間そのものに近いからだ。情熱を以て物質の生地を覗く唯一の形式（短詩に於ける）であると信じるからだ。

私はこの世に生きて卅年、確信を以て信じることの出來るものは、私といふ一個の肉體に過ぎぬと知つた。私は私の肉體がもつ情熱を正當に計量しやうとする。（情熱や意志の計量的性質は不明だが兎も角計量され得ると考へて決して差支なからう）私といふ人間の全情熱の計量的性質を明白にしやうとする努力は、結果として私の川柳を生む。かゝる時、私にとつて川柳とは絕望的に精妙な科學であるのだ。私の肉體は情熱を以て私の歌を歌ふ。それ以外に凡そ私の川柳創作の基點はない。興味はない。私の情熱が川柳の形式を採る時、その形式が反映する內容として鑑賞者へ社會の批判と映らうが、單に世相の描寫と見えやうが、若しくは昔乍らの感傷と映じやうが作者たる私は與り知らぬ。私は私の情熱の計量のみで、川柳作家たる覺悟に於て何の不都合も感じないのだ。只私も亦この世に生きてあらゆる人々との交渉のうちに在る以上、私の情熱が偶〻社會性を帶びたこころで亦當然なことである。私は作家論をかき川柳時評を書いたが、それらも亦私の情熱表現の一形式である點で私の川柳と些かも異らぬ。

私は餘りに偏つたものゝ云ひ方をしたかも知れぬ。それは畢竟私が川柳を愛してゐるがためである。愛するものへの惱みと懷疑——だが筆にする以上私は常に確信のみを語つてきた。私は杏三論に於て川柳の秘密は肉體の秘密であると云つた。川柳家の性格とは川柳を把握して歌ひつゝ、一瞬も止まることなく獨特な行動をするその人の肉體全體をさすと云つた。先づ諸君は次の川柳を御覽になりたい。

水銀は騰り默殺されてゐる　路郎

暴力は　よしキリストも　殺される　同
夢に風起り文字なき原稿紙　亂　耿
皆すつと立つ葱畑へ落着かう　山　雨　樓
若き女に窓敷が多かりき　綠　雨
（HOOO, AH　の匂ひが海の足にする　愚　陀
骨盤が悲鳴やあげんバスガール　琴　人
何處からかお七が笑ふやうな夜　雨　町

これらの句に對して、川柳作家の眼とは如何にも常人の眼とは違つたからくりのものだと人々の批評精神が戸惑ひする所以のものは、まさしく作者の肉眼が獲得した秘密に存するのだ。作者の大腦皮質が完全に理解したある自然の過程に存するのだ

私は時評〔眞實とは〕に於て、諸々の事象は詩人の正確な寫實主義に於て捉へられる時、初めて人を動かす眞實となるのだと云つた。寫實から最も緣遠いとせられる象徴主義について、之が樹立者の一人マラルメに聞かう。『物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡、自ら心象の飛揚する時は歌成る。物象を明示するは詩興四分の三を沒却するものなり。讀詩の妙は漸々遲々たる推度の裡に存す。暗示は卽ちこれ幻想に非ずや。這般幽玄の運用を象徴と名づく。一の心狀を示さむが爲、徐に物象を喚起し、或は之と逆まに一の物象を採りて、隱明數番の後、これより一の心狀を喚起し離せしむることこれなり』卽ち象徴主義も亦現實を對象とする寫實の基點に立つことを知る。只問題は寫實した結果を如何なる言葉に創造するかに在り、如何なる表現形式を採るかに在つて、その相違が浪漫派となり、新古典派となり、象徴派となつて現れるに過ぎない。これは川柳に比べて遙かに多くの言葉を使用する長詩の話であるが、川柳も亦正確な寫實によつて現實に迫るのだ。現實を對象として如何なる寫實をなすか、その寫實に依る實感を基礎として紡ぎ出す想像の世界や、變幻自在で捕捉し難い內在律を如何に制御するか、これが作家にとつていつも殘された問題なのだ。詩人の現實主義とは現實を生のまゝに暴露することを意味せぬ。現實を生のまゝでしか表現出來ないやうな寫實の眼は、詩人の眼ではない。こゝに一つの石がある。この石は光線の無限の戲れを持つ。かゝる時、この石は人々にとつて決して同一の石ではない。石は一つである。而も一つとして同じ石ではない。寫實といふ言葉をいきなり概念の部から索引して論ずる人々に問ひたい。諸君は、たとへば犬を觀察する時、犬を見てゐるのか。それとも犬といふ言葉を見てゐるのか。ものが見えて見えて仕方のない眼、それが詩人の眼だ。そんな眼でなければ本當の寫實なんて出來はせぬ。ドストエフスキーは言ふ『人々は私を心理派だといふ。だが私は決して心理派ではない。私は單なる寫實派に過ぎない』と。詩人の寫實は正確になればなるほど、現實に肉迫しつゝ而も一般人の現實の姿からは益々離れてゆくのだ。かくして川柳家といふ一習性の夢みた新しい夢が、現實の上に織出される。それが我々の（少くとも私の）川柳ではないか。

近作抑揚

路郎選

お玉杓子のそれぐに影を持ち　神戸　素生
斷つて歸すに下駄を穿く灯り　同　同
さしはさむ女の嘘を許しこき　同　同
荷造りも田舍へ歸る嵩こなり　同　同
鼻からをショールで卷いて待つて呉れ　大阪　無鬼
工事見れば失業救濟かこ思ひ　同　同
外交の今日も忌こいふ文字に逢ひ　同　同

新婚旅行

新妻こ行けば寫眞屋つきまこひ　同　同
夜が明けて初めて知れた簡易な死　螢ヶ池　白眠
血を咯いて今年の春を徂かしむる　同　同
咯血の哀れ度胸がまだ出來ず　同　同
新綠の記事の上なる藥瓶　伏見　丁路

鼻茸を切る

大阪市民病院　庄萬よし

涙を振つて馬鹿を斬るといふ言葉があるが、涙をふるふことは簡單であるが、馬鹿を斬ることはそう簡單ではない。鼻茸は自分が切るのではないが、切られる決心は自分がするのである。

私の可なり大きな左の鼻腔に、鼻茸が出來たことを氣付いたのは三年の前であつた。いつとはなしに右の鼻にも左に劣らぬ奴が出來てゐた。この兩方鼻腔に自然發生した自分の骨肉を分けた小指先大の茸が、色々な場合に私の生活を苦しめた。

第一に好きな酒にたらふく醉へないことである。今日は一つ醉つてこまそうといふ場合に中途に鼻茸が邪魔になつて中途で止したり、幸ひに可なり量を過ごすと翌朝は巨大な鼻腔の交通閉鎖である。この交通閉鎖は四五時間の讀書の跡でもきまつて斷行せられる。こりや面白いと言ふ新刊書に出くわした時急用も飯も打ちやつて十時間十五時間ぶ

誘惑をするな〳〵と來てしまひ　同
寄り取りと五枚も寫眞置いて去る　同
空想の戀は條件ありすぎる　蛍ヶ池
見舞ふてもくれぬと雨が思はせる　同
得心をさしたる嘘がふと淋し　同
だまつて居れば二割減だの解雇だの　同
プロの血と汗のお金がおちてゐる　同
享樂のバイオリンなら鳴らさない　同
勉强に飽くと妹すぐ歌ひ　松山
孟蘭盆會舞妓になつて詣でに來　同
ふわ〳〵の椅子で痔を病む支配人　同
病妻の寢床へ借りた金を敷き　同
失業の二階に若葉明るすぎ　同
講義錄封も切らずに遊ぶ春　同
缺損のつゞく會社の櫻咲き　鳥取
樂隱居出來ぬ舊師の服の色　同
彼の家も男だつたか鯉を擧げ　大阪
ラッシュアワーに押されて見たい人も居る　同
打擲のあとを寢顏に苛まれ　同
片袖のかたみもなくて踊の夜　同

同　禮二
同　同
同　奈緒美
同　同
同　秋無草
同　同
同　青帆
同　同
同　同
同　湖山
同　忠彌
同　同
同　壽仙
同　同

つ通しで卷を閉づるのを忘れる樣な讀書は人生至幸の一つだ、この感激もなけりや人間はおさらばだ。完全に三ヶ年もこの感激を奪はれて仕舞つてゐた。も一つ商賣上の演說に直接この鼻茸が妨害した、無產運動に演說は否應なし課せられる勞働課目だ、公會堂あたりでは人數も多いから十五分位ひでお茶を濁せるが農村へ行くと四十分程やつて吳れ一時間お願ひだと來ると、特派辯士たるもの僕は鼻茸でれとも言ひ得ない、演說は結論が骨だ、序論は何の道を行かうと結論でしまへば及第だ。それが一時間以上になると中だるみ尻すぼみに墮し易い。論旨の中途で鼻がつまつちや因果な鼻だと愛想が盡きてしまふ。愈切開の日が來た。手術は後藤博士の執刀によつて二十一日左、二十二日右、合計四箇の茸は鋏んで、れじて、根こぎもぎ取られた案じるより生むが易いといふが、不自由ながら其日其日が過ごされるものが今日手術臺に上らう決心すには並大抵の苦勞ではない。

自分はマルキストとしてあらゆる科學を信ずる決心をしてゐる——。また信じなければ私の仕事も鬪爭も無意義だ。自然科學も信じる社會科學も肯定する、唯物辨證法に一點の疑ひを入れない。だが、私の生ひ立ちと半生は軍人堅氣から自由主義、戀愛至上主義からおでんや哲學まで變轉進化して來たことも亦事實だ、そう簡單にソシヤリストやマルキストに全習慣を置き換えられるものでない。卑怯なやうだ「我此土安隱天人常

尖端の唄で自轉車風を切り　鳥取　耕民
男へも見せたい記事の主婦之友　同　同
紹介所あるまで來いは氣がながい　釜ヶ池　舟路
馬鹿にされてゐればいゝのだ働かう　同　同
安靜も苦しい春の野よ山よ　同　六華
慾は言はない散歩出來れば　同　同
義理見舞大きなマスク掛けて來る　同　藏六
痩せ切つた血を研究にまた採られ　同　囚
刑務所がましこいふ話ばかり聞く　同　愚竈
死をば讃えてしかも生きたし　同　同
温室の中へ二人は消えて行き　龍田　翠峯
命まで差し上げますこ言はざりき　同　同
生きん爲相思の二人西東　同　利生
結果にはかゝわりのない勤め方　同　同
俺の若い時はこ無理な事を言ふ　同　双車
出し前の相談になり默したり　同　同
あつけない政變依然釣りに凝り　長野　柳兒
食ひに來た下戸お勝手で邪魔がられ　同　同
儉約を妻にも賴む日が續き　廣島　露斗
きんしゆくへさからうやうに家が立ち　同　同

充滿」といふ法華經の一喝を繰り返し繰り返し二回の手術を受けた。

十五分の手術中は觀念の眼を閉ぢた、手術中には兩眼から悲しみではない涙の流れるのを覺えた。

だが併し、第三日にはもうこの苦しみの涙は歡喜の涙となつて改造やら中央中論の三百頁ばかりを一瀉千里で餘念なき讀破を續けた、消息の七八通も書いた。府縣會選擧への對策も大畧出來上つた。曰く無産黨の合同問題、曰く住友爭議對策……等々にも成否に關する見通しが出來た。それにしても自分は自分の進路に殊に自分の身邊に邁進を妨害する鼻茸の多いことを確實に認識しなければならない。觀念の眼を閉ぢて手術と切開だ新しい文化と藝術とは奮い文化と藝術との打倒の上展開せられねばならない。

血みどろの中に鼻茸轉げてゐ

酒　塲　琴　人

いゝかげん醉つてしまつた二人、もうそろ〳〵氣分を轉換してもよいと、綠の街路へ出た、初夏らしい夜風がスーッと醉顏を撫でゝゆく、私達は仲よく腕を組んでいゝ氣持に鋪道を踏んでゐる。夕闇せまれば……といふ感傷的なネオンサインの紫青色に引寄せられるかと思へば、てなもんじやないかないかと美人座の赤い灯が招いてゐる。墓塲のやうな感じもいやなら、騷々しいのも飽いた、沈默の會話はそんな事を お互に靈感しあふてゐる。プトSの足が止つた、二つの魂は今完全

こんごめはひとりで來るぞ握らせる　大阪　夕鐘
我が庭であればと思ひ石を撫で　同　同

I　子

人妻のうすい化粧へ螢飛び　松本　民郎
駈落もならず時雨を唄ひぬく　同　同
新聞は疊んだまんま子は病氣　京都　水馬
說教と言ふ誘惑に注意しろ　同　同
物思ふ背に柱の借りられる　鳥取　青水
賣る事に決めたる庭の苔青し　同　同
勞働歌巡査の垣へ投げつける　大阪　魚郎
夕暮の鐘が鳴ります資本家へ　同　同
出迎への午圓タクですれちがひ　犬山　練屋丁
赤々と夫の顔へ竈の火　同　同
吾に吹く風吾に照る陽のつめたさよ　大阪　大夢子

女房へ

髪結賃だけはシマッをして呉れな　同　同
婚にやる話へ咳をしてこまし　宮津　水郎
金は落ちてず蛙のミイラ　同　同
中學を卒へてゐるので斷られ　大阪　日々城
急診をかへし燈明さゝげたり　同　同

に一つになつてゐる、無言のまゝでとある酒場へ肩を並べて亦這入つた、一人になるのは淋しいからネ。

左樣ならが云へず酒場へまたはいり
別れるがいやさの酒が更けてゐる

或る貞操帶

伊藤愚陀

×

書物は人間と同じ敵を持つ、曰く火、濕氣、虫、時間さうしてそれ自らの內容
（ヴァレリイ）

「やなぎだる」——古い黴の生えた柳樽——青ざめた、灰色の句が荒涼たる冬の林の樣に立ち並ぶ。凝固した笑ひが、歪められた心が氣障な顏を出す「誹風柳樽」侮辱され、嗤はれ、輕蔑され、棄てられた彼等よ。しかし、耳が話し、口が聽くとき、それ等に交つて、久遠の生命を呼吸し、觸れゝば溫い——OH！ロボットではないんだ——句を鼻が見付ける。丁度それは眠りが目を刺かすかの樣に。これ等の句の下にずつと餘白が橫走つてゐる——名なしの權兵衛。その餘白が語る

その昔男ありて、心をひそめて、ひたむき句を創ることをいそしみたり。心に名などなくともよけれ、自ら詩骨のなるを。日頃靜かに芭蕉が翁の「柴門辭」を繙きてありき——予が俳諧は夏爐冬扇の如し。衆にさかひて用いるところなし——

餘白に旺溢する素晴らしい氣負ひを持ち、「詩骨自ら鳴る」と觀じ來つた、ある男の樣な

落さうな羽織を着てる藝妓なり　同　みつる
海がよいレールがよいと死に場所　同　公二
支拂ふてくれる氣配に世辭が出る　同　白雨
事勿れ主義に今宵の酒となり　同　木偶人
チップの嵩でちがふさいなら　金澤　菊路
字がまづいだけに百圓借りそこね　同　同
草薙いで彼女を先に通らせる　大阪　同
香水を猫にもかけて妾夏　同　石川　しごし
月末に行くと果してお留守ですもう紙幣が出さうなものと紙屑屋　同　同
我が腕を見よと恨を買つてゐるサボテンは疵も大きくなつて行く　朝鮮　如空
借りなんぞごうでも言へる事にして牛追へよ打てよと税をかけて來る　同　了念
無造作に屑屋人形も入れて去に　明石　同

明石の海邊

遠足に海月嬉しうなぶられる　同　山茶花
チユウリップローマンチストの部屋に咲く　大阪　同
物欲し相な顔はすまいと煙草喫ふ　同　大和　勝二
ルンペンへ靴の先から黄昏れる

人間があの餘白の中に自己を鞭ちつゝ未來を臨んで居なかつたと誰か云ひ得るであらう。

×

君に、君に、君にも、情熱を理智で抱いて、靜かに長く續いた餘白を與へるなら——君の句から、君の美しい又は美しからざる雅號とか云ふものを奪つてしまつたとしたら——忙はてゝはいけない、勳章を剝られた軍人の樣に、彼氏の前で放屁した彼女孃の樣に——誰も奪るとは言はなんだよ、奪つてしまつたとしたらばだ、古色蒼然とまでは行かなくとも、自動人形が手を上げた時と、下した時位の開きしかないものとは、或ひは成りはしないだらうか。句が平面的な、たゞ〳〵平面的な背を君に向けはしないだらうか。白眼で君を睨むかもしれない。大きく開いた口から嗄れた聲が、氣の狂つた蓄音機の樣に蹣跚き乍ら倒ひ出して來るかもしれない。卒直に言へば顚落の歌も豚はずに消えてゆく。霧散し盡して深い空虛が、ぽつかりと黑い裂目を見せたまゝなんだ。

×

嘲笑された「柳樽」輕侮された「せんりう」よ。DAGA——BUT——白白と、心にくいまでの餘白の世界、餘裕の世界。想像が縱橫に走る餘白、彼等には語り得る餘白が、古くして新らしく存在し續けて來た。
未來に於ける昭和の「SENRYU」よ。お前はどこに語るべき餘白を持つてゐるのだ。

太陽へ彼女恐れ氣もなく素顏　同　同

サンルーム肥つた猫は羨まれ　尼崎　虚白

廻診の獸醫に逢へり別莊地　同　同

燒香の襟足にはや噂され　鳥取　暢山

上役は諂らふ事も知つて居る　同　同

嬲るのに姉は少しく眞面目すぎ　大阪　奇可愛

蒲公英が有つて子の足はかごらず　同　同

ルンペンの群にも入れず今日も生き　同　樹光

ビール嬉しや燃ゆるが如き友の顏　三重　沃里

偶々の不平を酒で充しとき　大阪　ぎさん

わてらかて社會奉仕と褄を持ち　同　鯉友

ピアニストに感ず

指先の神技彼氏も人なりし　同　洋々

重すぎる荷を引く車力人を待ち　新潟　爲八

米をかす嫁の指輪のよく光り　大阪　白扇

風に吹かれる煙にも似し生活よ　明石　啼聲

他人の子でもよいのだ抱いて見たい年　大阪　明晴

くちびるがうすしお前は薄情者　姫島　方眠

ダンサーの踊り疲れて子を思ひ　大阪　泉流

大掃除寫眞はあとで見よと言ふ　高知　春水

「街に住めば」

高橋かほる

螢ヶ池の句會へ行く日家を出た私の前を好ェ娘はんが三人通つて居ました。向ふからトラックが疾走してきます。……すると其の運轉手と助手が大きな手を上げて「五十錢いきまよか」……

街頭偶語

三　好革郎

街路樹の葉が茂つて來た。交通巡査のズボスが白くなつた。夏が來たなアと思ふ。

パンを求めて歩き疲れたらしい顏が尖つた眼をしてゐる。

この眼が恐ろしい。この眼が殖へて行くのが恐ろしい。自分の眼がさうなつて來てゐることには氣がつかないでゐたが。人の眼の中に自分の姿を發見した樣に感じられる。

◇

久々に萬よし老と會つたた、髯を鼻下に貯へてゐるので別人に會つたような感じを受けた、僅かの髯がこうも人の相を變へるものかと今更の樣に驚ろいた。

髯といへば、いつも林有陀君を想ふ。畫家の彼は、長い美髯を貯へてゐることに依つて彼を畫家らしくさせてゐる。頭の髮を長く伸ばす洋畫家に對し、日本畫家の彼が長髯を貯へてゐるのは、ブラシに對する筆といつた形である。特長を何處かに出して人の眼を引かうとする努力がこういふところに出てゐる。

萬よし老は髯の効果を説いて曰く「交渉に

誘惑に勝つて歸つて妻の酌　大阪　一久
鋭角を月にさらしたビルディング　神戸　竹風
ハンモックいきなり二ッ三ッふり　金澤　今雨
唇の乾く淋みしさ一人居る　大阪　海洋人
餓へ死にか盗みかでした判事様　高知　紫白
辯解は寄つてたかつて容れられず　敦賀　土筆

聖德太子忌

春風に雨だれの散る法隆寺　大阪　葉光
言ひ過ぎて出る下駄の音が氣にかゝり　鳥取　源太夫
喜ばすコツを覺えて母一人　大阪　凡々
ひとり者訪へば箒を借にをり　神戸　靖弘
流れ入る夏の感度へ默すのみ　大阪　沐天
日記帳此の煩悶をつけてをき　同　清光
常識があつて浪人にしておかず　石川　溪鶯
我体風の形が頰に觸れ　大阪　四五磨
春の宵思案の家を曲りきる　京都　一正
商人へ嫁くと妹言はぬなり　大阪　沒食子
俺に似た過去で頰骨尖つてゐ　長野　有爲郎
海邊の子齒並の白さ目立つなり　大阪　紫光
拗ねた娘の柄がきれいなすり硝子　神戸　不然
金槌の反響がある大倉庫　大阪　白柳子
早く死ねとはあまりな言ひ草だ　釜ヶ池　梨風

行つた時に、此の髯があるので、先方が敬意を表して話をしてくれるからね……。」と

長い間、道頓堀に出なかつたが、赤玉の照明が全部青い電燈に變つて、涼しさうな色を道頓堀川に投げてゐる。電燈は一戸一燈それも十燭光といふ農村の現狀と對照して、觀樂境に消費されてゐる。無數の電燈、ネオンサインを見るとき、これでよいのかと思ふ。

◇

自動車の洪水だ、こんなにハイ、スピードの乘物を利用しなければ、生きて行けないとは、何たる忙しい世の中であらう、忙しく働らき、忙しく遊び、忙しく物を食ひ、忙しく戀をして、そして人生を忙しく終る?。

何も考へてゐる暇がない、只無暗矢鱈に、前へ、前へと突進してゐる。何處へ往くといふ的がある人は何人あるだらう?。

◇

今年は麥藁帽子を冠つてゐる人が少ない。梅雨前に買ふと、一夏に二つも三つも買はなければならぬから儉約してゐる人が多い爲めであらう、いくら安くなつても麥藁帽子が買えない人が多いのである。賣れないといふことは作る人にとつて大きな打撃だ。この最後の打撃を引及けるのは麥を作つてゐる百姓である哀れなる農民は水も呑めない、それに僕はどうだらう、酒を呑み、麥酒を浴びて、觀樂を貪つてゐる。何か罪惡を犯してゐる樣な氣持になる。

醫者二題

沙門釋子

子供の頃隣家に櫻十字といふ醫者があつた。大そうよく流行る醫者で、蒲柳質の僕は始終この醫者の厄介になつてゐた。そこの奥

稼ぐ父の腰の痛さをさするなり　大聖寺　一寛

皆俺の敵だと或日思ひけり　大阪　三碧

本人はともかく母の神参り　愛媛　英賀夫

プラチナの歯並嬉しく笑ふ妻　大阪　いわを

博士號家出の兄も歸つて來　島根　久麿緒

よかつたねえと母何遍も何遍も　大阪　俊一

あんな子が今日洋裝の面白さ　京都　相界

失業のけふも日向に犬と居る　大阪　おさむ

叱られて木の芽の露をこぼしに來　神戸　桃水

身二つになつて產院いやなとこ　大阪　千雨

やがて生活をおびやかす雨となり　兵庫　雨聲樓

枕灰皿のいる年になり　大阪　苦茶坊

誘惑に勝つ灯に育ちジャズに剛れ　同　輝翠

すねるだけが勢一パイの弱く生き　大聖寺　大聖

階級の差を知つて子の行儀よく　大阪　八歩

ラジオの笛耳がいたいとやめさせる　同　憲坊

薄利主義生甲斐のある店をもち　神戸　繁堂

初めてにしてはと接木褒められる　大阪　素萠

案内人戰術上の講義もし　西宮　三代吉

草の芽を無情に摘んで打ち明ける　大阪　柳次

錢湯の眞晝孤島にある心地　釜ヶ池　沙門

さんといふのが、子供心にも大へん美しい人であつたのを覺えてゐる。診察を受けにゆくと何んだかだと愛想よく言葉をかけて、珍しい御菓子なんかをよく呉れたりした。

誰彼と萬遍なく愛嬌を振り撒くので氣受けがよく、とりたてゝよく見るでもない此の一介の八百屋醫者がそんなによく流行るのも一ツは、此の奥さんの社交術の賜物であつたらしい。なんでもこの細君は元は看護婦であつたのが先生と出來て奥さんに昇格したとかいふことだつた。

ところが、或る日數人の警官と刑事らしいのがドヤドヤとこの醫院に闖入して先生を連行してゐつたきり、此の醫院の門はとうとう開かなくなつた。

僞醫者であつたといふことが翌々日の新聞の社會面に載つた。近所の人は寄るとすぐその評判をした。勿論美しい奥さんは、その後どこへ行つたことやら誰も知らない。流行醫即僞醫者！。何んたる皮肉だらう。

◇

暫くして櫻十字の跡へCといふ醫者が移つて來た。福島邊に居たのが北區の大火に燒け出されて新らしい門戸を此處に見つけたのだ。福島くは閑古鳥が鳴く程の淋れ方だつた此のCが、こんどは大きい言ひ方だが門前市をなす位の大流行醫におさまつたのだから世の中も肉皮だ。

「Cさんは燒け太りだ」近所界隈の評判となつた。

此のCさんが又大へんな愛嬌者——それも夫婦揃つてだから評判の好いこと。それにCさん夫婦はどちらもデップリと脂肪肥りのしたお相撲のやうな似合のカップルと來てるんだから、御目にかゝつただけでもうな

キアフエのまひるのムード

キアフエの陶器の音かよアミはなく　大阪　亂果
教養のそなはつてやゝ冷たい娘　螢ヶ池　五百吉
頬紅の濃さも言つてる圓滿さ　大阪　宏朗
見切品道一杯に客を呼ぶ　螢ヶ池　道人
おしめ行き辨當が行き總出なり　大阪　水車（二期改め）
忘れたと言つて澄してゐるもよし　螢池　鬼子
身にあまる言葉誘惑とは知らず　大阪　里犬子
巣の蜘蛛よお前もやはり淋しいか　螢池　石松子
新綠の奈良若妻の氣が疲れ　大阪　哲郎
わたしに目宅には口が似てゐます　螢池　紅玉
家出した時の强氣のないベンチ　愛知　巧笑
道端に坐つて見たいくらしなり　尼崎　義郎
老いほれて母校昔の姿なり　螢池　官八
仲人が話せば娘飛んでにけ　伊丹　松好齊
淺間しく生きて義弟の肉を剝ぎ　螢池　可章
お祭に年を忘れて喧嘩をし　大連　薫
父の夢一度見たいと願つて寢　螢池　清柳
ローマンスカー停つた處に赤い屋根　神戸　鬼石
意見する柄でもないが捨て置けず　螢池　俊朗

んとなく福々しい、ゆつたりした氣分を感じる。

「あんなよく釣合のとれた夫婦もあつたものだ。甘く仲人をしたものだネ」

祖母なども常にこんな話を言つてゐた。

奥さんが調劑を受持つてゐて、暇々には待合室へ來て患者に話しかけるし、先生は先生で愛想よく診察をしてくれる。僕が中學へはいつたときでも、色々學校の話なんかして喜ばしてくれたものだ。裏店のおかみさんにはY談の一ツもしようし、子供には子供らしく職人には女の話と、その社交振りは正に百パーセント。

腺病質でCさんの常顧客だつた僕は、Cさんが好きで少しの風邪位でも直ぐ診察室へ飛び込んだ。そして先生の笑顔を見手を握つて貰つただけで、もう氣分がよくなる位の先生崇拜者だつた。

ところが、いつとはなしに奥さんも藥局や待合室に顔を出さないやうになるし、書生の五六人もゴロついてゐるやうになると、先生の態度にもモウ前程の寛かさと愛嬌を見られなくなつてしまつた。徵兵檢査の豫備檢診表とかいふのを持つてCさんの診察室を、久し振りに訪れた頃には、世間並みのツンとした醫者を僕はそこに見出すだけだつた。

歸宅してその話をしたら、祖母はこんなに言つた。

「金が出來ると、人間て豪らそうにしてみたくなると見える。」

一九三一・四・二八

選手權の提唱

御旅支部　櫻井園角

前號綠之助氏の一文は、大分反響があつたやうだが、短歌俳句家の左翼と本格川柳家を合同して別名の下に活動し得るとしても川

「三十四頁へ續く」

柳の絮

長野吉高

（四）

風か中空で旋廻して、太陽の黄金の塵がしんさんと降つてゐた。

珍らしく袴を着けた雨軒居士が、薄汚れた茶色の中折を稍々後冠りに脊をぐつと曲げ、俯向き込んで、代々木練兵場の一角をのろ〳〵と歩いてゐる。ロダンの「シンカー」にキモノを着せ頸に繩でもかけて引張つたら先づこんな格好だらう。

妻君は、彼の脊骨の曲屈を、若い時から机に嚙りついて、不規律に本ばかり讀んでゐたからだと言ふ。曲つた脊骨が生理的に見て怎うあらうと、學殖に如何に比例しやうと、其んな事は別問題だ。彼女はアイロンを見る度に雨軒居士の猫脊の事を思出すと言ふ。アイロンをじゆう〳〵と脊中にあてゝ、曲つた骨を引き伸ばしたいとでも思ふのだらう。

ベンジャミン、ローゼンブラットの短篇小説に、或田舎の少女が都會に出て百貨店に雇はれ、飾窓の中に立つてゐると其の頭上の所に「この少女を笑はした者には賞品進呈」と書いてあつた——といふやうな悲しい喜劇場面が描かれてゐる。雨軒居士を飾窓の中に立たせて「この者の猫脊をアイロンで伸ばした方には賞品進呈」とでもやりかねない妻君だ。アイロンと猫脊なんてローゼンブラットでも一寸面喰ふに違ひない。

「先生！雨軒先生！」

聲に釣られた雨軒居士、この問題の猫脊をちよいと反らしてフイと顔を上げる。

「ほう、夕陽君か——。」

眼の前に、薄水色の合着にボヘミアンネクタイをひらつかせて頭から靴の先まで五分の隙も無いスマートな詩人、夕陽君が、馬の樣に長い顔を振りながら、マニラの蛇洋杖で尻を突張つてゐる。近頃、齒の浮くやうな低俗な小唄を作つて流行さしては蓄音器に吹込まれて得意になつてゐる此れが夕陽詩人だ。

「意外な所で——。」

「ヤア。」

雨軒居士は、ドイツ語の肯定詞のやうな聲を飛ばす。

「どちらへ？」

「なアに、其處の青山クラブへ來たもんだからね、こちらへ廻つて明治神宮に參拜し、ついでに此處らを歩いてゐるんだがー。」

「青山クラブ——あゝ、新聞で見たです。今日は午後一時から先生のご講演があつた筈でしたが……。」

「無理に引張り出されてね。」

「盛會だつたでせう。」
「餘り盛會でもなかつた。尤も僕は講演をやらなかつたが——」
「はア？」
「講演狂の外骨君が、勝手に僕の講演を發表して置いて、後になつて厭やでも出ろ、と言ふんだ。」
「はゝア。」
「至方なしに引受けたものゝ、其の事をすつかり忘れてゐてね。で、會場へ駈けつけた時には豫定時間は昔に經過さ、外骨君が頗る憤激したがね。君、一体これはどつちが悪いと思ふ——」
「は、ごもつともで……。」
夕陽詩人は、面倒と見てとつて、巧みに話頭を轉じて了ふ。
「先生は只今、何かお書きになつてゐると承りましたですが。」
「いや、言ふ程のものではない。君は、やはり詩を作つてるンだね。」
「は、やつてゐるです。」
夕陽詩人、急に眼をぎらつかせる。
「君だつたと思ふが、此の間新聞に何んとか言つてゐたのは——」
「は、私です。あれは「如何に詩を考ふべきか」といふのです先生も、お讀み下さつた事と思ひますですが——。」
「讀まんよ。」
兩軒居士は、はつきりと言つてのけたが、こいつが悪かつた。
夕陽詩人は、馬面に失望の色を浮べて
「其れは殘念でしたです。何れ近く私の詩集を出版する筈になつてゐるのです。其の節は、先生にも是非にご高覽を賜はり度いものです。」
「そりやア結構だ。」
「は、いや恐縮です。」
ハンカチで口を拭いて、ぐつと胸を張つた夕陽詩人。
「實は、私の或主張からして、今度の計畫が成つたのでして——」
「主張？」
「は、さうです。」
夕陽詩人は、其の長い顔を時計の振子の樣に搖り始める。
「先日、新聞でも述べて置いたですが、つまりです、あれの要點を簡單に申上げますことです——一体この詩といふものゝ本質は感情と理智とが相渾融し、或は其の二つが別々に詩の内容となり、其れにリズムが加つたものだと思ふです。」
「ほう。」
「古代の詩にも、リズムといふものは、ちやんと有つたです、ダヴイドやソロモンの詩は琴の音に合して、伶人に歌はしたものが多く、ホーマアの詩だつて、元來は歌つて歩いたものなんです。」
雨軒居士は、そつぽ向いてべつと唾を吐く。
「詩の本質の中で、リズムは散文に對して、詩を區別するに重要なもので、詩にはリズムが無ければならぬです。現在では、詩は自由になつたですが、其の自由詩でも内面的感情のリズムがあらねばならぬです。シエクスピアも自由詩を書いてゐるですが、彼のはフランクバースといふ詩形です、これには定音律は無いですが、内部的リズムは有るです、現在の日本の詩の多くは、どうも此のリズムが餘り善くないです。斯の如き詩が、中央に於いて發表せられると、詩の若き愛好者をして、大いに其の前途を過らしめると思ふです。」
「はゝア。」
「自由詩なるが故にリヅムを無視するなぞとは亂暴で自由詩と雖も心のリヅム卽ち情緒のリヅムですナ、其れが必要です、必ずしも定型律に據る要はないですが、然しです、リヅムの稀薄な、散文にラインとスタンザでもつけた樣な詩は善くないです。」
「はゝン。」
「和歌、俳句、川柳等もさうだと思ふです。假りに和歌を例に

こるこですナ。最もよく誤られるのはあの石川啄木です。啄木のえらさは、其の豐滿な感情こ理智こを、如何に和歌の上に盛上げたかにあるので單なるあの和歌形式其のものでは斷じてないです。在來の和歌體製を破つた、所謂破調形が新味なこ思ふのは大變な間違ひです。無論、時代がですなナ。人間の生活樣式を造る如く、詩だつて其の時代〳〵に卽した表現樣式は必要です、一定不變の古律を守る必要は無いかも知れないです。然しです、時代は人間の生活樣式を造つても、人間其のものは一定不變である——こ、同樣にですナ。詩は其の時代〳〵の表現樣式は生れても、詩其のものが持つ本質的リヅム其のものは、不變であらねばならぬこ思ふです。」

「はゝア、成程——。」

雨軒居士は、時々合の手だけは入れるが聞いてはゐない。夕陽詩人、盛んに吹きまくる。

「自分で自分の感情を盛るに、詩の法則、卽ちリヅムなんて不用こぬかす奴があれば、其の愚や洵に憫笑至極です、奴等は、散文こ詩に就いての區別の、初等文章學すら知らないです。其れで——。」

「解つた——。」

流石に雨軒居士も聊かくさる。夕陽詩人は頓着ない。

「心のリヅムを盛れ、これが詩の鐵則です。和歌、俳句、川柳等凡ゝ詩こいふものゝ一類に入る限りのものは皆、リヅムを無視してはならぬです——で、表現樣式なんぞ、其んなものごうだつていゝです。あの啄木ですナ、彼だつてあの獨自な感情こ透明な理智こを、巧妙に和歌樣式に構成したゞけです。其れ以上の何者でもなければ、又其れ以下の何者でもないです。若し私に彼の批評が大膽に許されるならば、歌人こしての石川啄木は取るに足らぬです。」

夕陽詩人、こゝでぐつこ大見榮を切る。

「要するにです。詩はリヅムを尊重せよ、其して感情的であつても、理智的であらねばならない。自然を歌つても人生を歌つても、詩人は自分の魂を凝視せねばならぬ——こ、言ふ樣な事を新聞には書きましたんです。で、此の主張の許に、今度私の詩集が出るに他ならぬです——ハイ。」

ぽん、こ左手で胸を叩いた夕陽詩人、右手の蛇洋杖を水車の如くにくる〳〵こ振り廻す。雨軒居士は、危ながつて二三歩退却する。

或一つの特殊な題材は、詩人の手にかゝるこ、詩的こも普遍的こもなる——こは、遺にゲーテは巧い事を言つたものだ。夕陽詩人の手にかゝつた啄木は、到 此の詩的こ普遍的に捏ね上げられて、ぺしやんこにやつゝけられて了つた。人間は、諧謔詩人によつて屢々愉快に、諷刺詩人によつては常に不快に描かれるこプレンターノは言ふが、人間の過失を當然の事こして許容せらるべきものこ示す諧謔詩人こ、過失を不合理なものこして嫌忌する諷刺詩人こ、夕陽詩人は一體この何れに屬するか？若し彼が諧謔詩人なら、アルトベルリンの一角で、リラの花賣るメッチエンの右頰につく黑子の色こ、甲蟲のつゝ色こ、此れを怎う書く？諷刺詩人こすれば、モスクワのゲルツエン街上で、かきの樣な痰に辷つた男こ、銀のスプーンでがり〳〵頭を掻く十八の娘こ、これを一体何んこ書く？

だが、特殊な題材を詩的こ普遍的にする事が詩人なら、夕陽詩人が諧謔派であらうこ諷刺派であらうこ論外だ。たゞ、モアール地の散步靴に、サタン地の洋裝で街頭を踊り行く日本ムスメ達のやうに少々安つぽくて氣障な點が問題になる。

「うわッ、うわッ、わッ！」

突然に湧起る喊聲、雨軒居士は驚いて其の方を見る。

「ほう、なか〳〵勇壯だ、やッ、突擊だ。」
右方は神宮の綠樹が、美しい自然の色線を放射する。左方は、茫漠とした代々木原が樺色に霞む。陽光に銃劍をぎらつかせ、煙の樣な砂塵を捲き上げつゝ、遙かに黑い影が右往左往する。
「君、時代といふものは恐ろしいもんだね。」
派手な着物に帶を胸高くしめ、日傘をさした娘が二人、華奢な体をくねらしながら、前をするりと金魚の樣に泳いで行く——
「はア？」
「昔はね、兵隊の調練は筒袖だんぶくろ、一小隊を六人と定めて、髻には赤紙を結付け、其れで鐵砲を擔いでゐたものだ。太鼓をドン〳〵たゝいて——。」
「い、いつ頃の話ですか？」
夕陽詩人は、雨軒居士の唐突な奇言に面喰ふ。
「明治三、四年頃だ。文久頃には、鐵砲を天秤棒のやうに擔いだり、臺尻を上にしてみたり右肩に擔いだり左肩に擔いだりしたものだよ。其して　には日本刀を負ふてゐた。」
「へえン。」
「今の者には、一寸想像もつかんだらう。號令が面白い「大つるべうたつしやれ」つてのがある——。」
「何、何んです？」
「大砲打て、といふ事だらう。大体日本の兵制の始めは、フランス式だつたらしいね。後でドイツ式に改革されだが——以後時代と共に、今日の樣になつて來た。」
「成程——。」
夕陽詩人はやつと感心する。
「君は陸軍兵の帽子の徽章が何か知つてゐるね。」
「知りませんです。」
「ほんやりしてゐる——あれは星形だ。」
「はア。」
「其の因緣を知つてゐるかね。」
「知りませんです。」
夕陽詩人はあつさり言つてのける。
「フランス式帽の頂點に、星形モールがくつゝいてゐる、大將六つ、中將五つ、少將四つ、佐官三つ、尉官一つた。現在將校の正帽の頂點には此れと似たマークがあるさうだが、つまりフランス式を眞似て、日本でも星形を陸軍のマークにしたらしい明治六年に制定して、帽子の徽章にしてゐるがね。」
「恐れ入りました。よくご存じで——。」
「いや、實はこりやヤ皆んな或豫備大佐から聞いたんだがね。」
雨軒居士は到々尻尾を出す。
「そこでだ、僕の頭にぴんと來たものがあるよ。君ば、フアウストを讀んでゐるね。」
「は、知つてゐるです。」
うつかり引つかゝつた。夕陽詩人は後悔したが既に遲い。
「星形は魔除けの印だ。フアウストにも禁呪の印になつてゐるで、フランス式帽の星形も魔除けに違ひ無いと思ふ。この點から推考すると、日本陸軍のマークも、フランス式に魔除け位の意味かも知れない。尤も、こんな事は知らないで、只フランス式を做つたに過ぎないのだらうが——豫備大佐にも此の事を一度話して置いたが、十分には解らないさうだよ。」
「なアる程——」
「魔除けと言へば思出すが、なか〳〵面白いのがある。」
雨軒居士の詭辯がそろ〳〵始まる。
「角本君も或週間雜誌に書いてゐたが、あれは僕が材料を遣つたんだ。」

「何んです？」
「此れを見給え。」
雨軒居士は、拇指と人差指とそして中指とで極めて變な格好を作つて見せる。眼の前に突きつけられて顔を赤くした夕陽詩人、遺に辟易して
「怪、怪しからん！」
「君、詩人らしく落着くんだ。」
雨軒居士は、洒々とした顔で笑ふ。
「この形は、日本では君の言ふ通りに怪しからん意味になる。だがね、古代ギリシャ及ひローマでは、大事な魔除けになつてゐた。」
「へぇン。」
「ギリシャ人は、此れを無花果と名づけた。流石に偉い。無花果とは考へたものだね。つまり、其の、何んだよ、女のアル形を意味してゐるんだ。十七八世紀頃になると、歐洲では水晶や象牙で此の形を彫刻し、時計の鎖にしたり、男の胸や女の肌着の紐に吊り下げてゐた。」
「へぇ……。」
夕陽詩人は妙な顔する。
「この迷信は、性の力が惡魔に打勝つといふ意味らしい。ドイツではね、女が此れをぶら下げると子供が出來ると言ふ。」
「ど、どうも……。」
夕陽詩人、雨軒居士にはすつかり持て餘す。先刻、長談義を喰はした其の仇を、美事にとられたと氣付く。で、警戒してぼつ〳〵逃げ仕度にかゝる。
「其れから、まだ面白いのが有る——。」
「ちよ、ちよつと先生！」
夕陽詩人は、慌てゝ雨軒居士の言葉を追つ拂つて
「其の、實はです。我々の例會がありますので——これから行くところでして——ご、ご高説は何れ其の中にまた……。」
「例會？」
「は、其の詩人達が集つて、研究やら作品の發表やらをやるです、毎月一回宛開くです。」
「ほう、何處で？」
「は、ア、アルスでやるです。」
「アルス？アルス社かね。」
「違ふです。其の力、カフエーなので……。」
「カフエー、成程。青い酒呑んで、赤い氣焔を吐かうつて理だね。詩人らしい、いや大いによろしい。」
「はア。」
夕陽詩人は擽つたさうな顔する。
「時に——君は今何處にゐる？」
「は、先日轉居しまして、今は此の代々木原の近くにゐるです」
「代々木の？」
「は、あの方角です。」
夕陽詩人、蛇洋杖で西の方を指す。
「二階から、練兵場が一眼に見えるです。」
「驚くよ全く——。君に習ふ度に轉宅してゐるんだからね。巣鴨から中野へ移つたのが一ケ月程前だらう。中野から又引越します、と言つてゐたが到々代々木原へ來たのか、餘り善い趣味ぢやない。」
「は——。」
夕陽詩人に、恁ふ捻り伏せられて到々頭を掻く。
「では行き給え。僕は此處を頓切つて澁谷へ出るから——。」
やつと放免だ。夕陽詩人は鼻つ柱の汗を指でこすつて、蛇洋杖を振り〳〵神宮の表參道口の方へ駈出す。（つゞく）

名句觸感

阿部閑生

照りながら白雲の駛つてゐると云つた天候のやうに、判然しないがそれでゐて氣慾りになる種類の事柄か、頭腦の一部で交叉して極めて散漫な閑寂を持續してゐる、皆まで聞いてやつては少し物體ない程度の熱心な談話が、無條件で開放されてゐる耳朶に流れ込む樣に收つて來る。が肝腎な箇所を聞き洩らしてゆくから、筋道は更に判らない、折々きり〳〵と頭が痛むのは談話か自分の何處かに自劣つたくて堪らぬ事があるからだ、次第に荒くて弱い稍捨つ鉢な氣分が釀成されてゆくやうでもある

一割をよそごとに聞く椅子にゐる　路郎

同じ靜かさと見えても、全く風波を知らぬ靜かさと、嵐の前と後なる靜かさと、低氣壓の中心にゐる靜かさと、既に嵐の起りやうもない月界表面の靜かさとは、その內實に於てものゝ動と靜を絕した相違がある。凡そ句を按じ詩に耽る程の人には情熱の伴はぬ安價な靜かさなど持合さう筈がない、動の時はまだしも安逸な時で、靜かに見える時こそ、險しく、恐ろしく、或は限りなく淋しく、惱ましき時なのだ、見よ白けきつて何時しかに霑ひの消えた瞳の底には、瑠璃光碎けて、はや微に火焰を孕んでゐるではないか、神經のいらだちが栗の毬の如くに見えるではないか、世間なんか云つてゐるのではない、壞れるものは壞れ、亡ぶものは亡べ、今のこの身を何うするかの問題だ、おうこの口、手、引金が僅かに動く迄の、一瞬間の無聊だ、永劫の無聊だ。

酒がいつしか水になつてゐる　路郎

假りに祖先の一人に弓削道鏡があつても系圖から其一人を消せば即ち自分といふものが存在しないのだ、と云つた坊さんがあつた、そしてこの善智識は其時盡く自分に對つてゐる衆愚の面々に、氣味惡い一瞥を呉れて、各々を最早動きの取れない體に宿命附けてゐる所の、自身の血に思ひ及んだ時、ぶるぶる

ツと身顫ひの出ない人があるか、階級が何だ、老弱が何だ、己が身内を環れる一滴の血を遠く考へ、深く究める時、心の統制は忽ち破られて、思想は混亂し、魂は逆轉するやうな事はないか、こぞつと寒からせた時は、その青い剃りたて頭が、火の玉に見えたものだつた、それから時を經るに從ひ、吾人に血ほご限りなく深刻なものは無いといふ事に想到した事であつた。

女中の子血の冷たさを思ひゐる　路郎

提げてゐるものを提げられるかい、と云つたのは兩國か福柳を釣出した時の話であるが、追つてる者を追つてゐるのが世の中の姿だ、何うせ同じ輪のうへをぐる〳〵環つて居るのだから、逃げてゐるのか、追つてゐるのか見極めがつかない、煩鎖も執拗もあつたものではない。

病臥してゐるに電話の印鑑の　路郎

生を出發點としての人生は成育であり、健康であり力であり熱であり、希望であり向上であり、そこに五月の陽は照り、草木は輝き、鳥は翔り、土石も息づいて見えるが、死を終點としての人生を觀ると、ダンサーも女給も、脚も眼も唇も只髑髏とその部分品たるに過ぎない、謂はゞ生の無意義と死の無意義との中間に、僅かに足許不確な躍を躍り、半端な喜怒哀樂の芝居をしてゐるだけだ、爾も與へられたる知覺、是を惱ますものに生活苦あり、犯すものに病魔あり、亡すものに老衰あり、泣いて笑つてゐるうちに近親といはず友といはず、ぽかりと〳〵消えて無くなつて了ふ。

無常とや猫も錦魚も死んで見せ　路郎

氣持が變つて惡ければ、先づ周圍を捨がぬものにしてかゝれ動くが世惡で變るが氣持ちなら仕方ない、心で爪繰る水晶の珠數、緒が切れたらばら〳〵だ、ばら〳〵だ。

この位の事を思つてゐるのは、おだやか過る百尺竿頭一歩を進めやうか進めまいか。

別れたらとも思ひ死んだらとも思ひ　路郎

頭腦の空虛を表明する犬の聲を出す女、裾にまつはつて猫撫聲の男、女の粕と男の屑はざらにあるけれど、屑屋も拾つては行かない、戀の成就と同時に對手の雄を喰ひ貪る一種の蟲類を前提として、女の糟の食ひさしを男の屑が繼承して片附けてゐるのは、動物戀愛の延長に於ける變態現象として解決すべきであらうか。

たべさしを食ふほど男惚れてゐる　路郎

瞬くうちに谿をとざし、と見るうちに空をおほふ、心は雲ではないけれど、晴曇明暗常なき心境ではある、未解決それの名が人生であるとしても、打ち捨てゝ置けない程の問題の盡くが割り切れない數字ばかりである、善因惡緣、縺れ糾れて一つとして解決かつかない、過去にはうち切れない追憶があり、未來には豫想せずに居られぬ不安があり、多感の情熱やをら身を起したのは、然し快刀亂麻を斷たん爲ではない。

何事も忘れやうとて蠅たゝく　路郎

近作柳樽

ひろし選

新緑へこぼれ松葉の當惑よ　島根麗亟
牡丹刷毛たゝけど心かへらず　同　同
乳房まろやかに愛兒の夢　同　同
時計が止つてる講堂の廣さ　同　同
されど木像は何も知るまい　金澤旭虹
青空澄めど啞は笑はず　同　同
鐵瓶が怒つた家族主義だつた　同　同
おしやべりに疲れた舌へ夏みかん　螢ヶ池康夫
藥壜若葉の山の色になり　同　同
金にちと餘裕が出來て眠たい日　香川三汀
よろめく生活へ内容證明　同　同
平等の縞の着物に滿足し　螢ヶ池正子
卑屈な心孤獨になつて行く　同　同

選後感想

▽麗亟君の四句では「牡丹刷毛」「乳房」の句がいゝ。「牡丹刷毛」は原句「牡丹刷毛をたゝけど心はかへらず」だつたが、訂正句の方によりやるせない氣持が出て居ると思ふ。「乳房」も原句は「まろやかなる」だつた。「講堂」も「廣さかな」だつたが「かな」は蛇足と思つて捨てた。「新緑」の句は「當惑よ」が少しキザに思へる。

▽旭虹君の句には新しい試みに生きようとする努力がどの句にもみえる。然し形式の簡潔乃至卒直さによつて、内容の貧しさを粉飾する事は許されない。「されど木像」は、端的に作者の忿懣的な感情は受けとれるが、何を意味するか判らない。「青空」の句も、一讀壓せられるものがあるが、新らしい内容をもつたものではないように思ふ。「鐵瓶」の句も「家族主義」に對する不滿の氣持は看取出來るがこれで完成された句と言へるかどうか。兎に角こうした、表現の句には、まだ〳〵大いに錬る餘地が多いと思ふ。一人よがりに陷いらず、靜思すべきではあるまいか。

▽康夫君の「おしやべり」は着想は古いが、爽かな句だ。「藥瓶」にも實感のもつ美がある。

▽三汀君の「金にちと」は「ちと」が不用意に使はれて居る。「よろめくくらし」はドキッとする句だ。調子も適切である。

▽正子君の「平等」には女らしい淋しさが出て居る。「卑屈な」にはおど〳〵した氣持が

牛のやう寢て居ればいゝ施療院　同　照夫

結局は如何に死ぬべきかを學んでた　同　白花子

欠伸せば膝のふるえる痩世帶　大聖寺　螢ヶ池　美玉

親方に御飯の早いのが好かれ

默考の前に墨壺休んでる　西宮　三代吉

思案の手へビラ渡される　大阪　水車

雪空へまだ意地がある鬼瓦　螢ヶ池　杜洋

獨り身の下宿に憎い女下駄　大阪　智惠子

誘惑も野心もなけりや淋しかろ　鶴ノ莊　晉天

彼女を見舞ふ

薄い紙に彼女への花は包まれる　大阪　愛緒

若く逝きし友を思ふ

隆る音も眞夜中死んだ友が來る　螢ヶ池　晴夫

煙突の淋しく見えるストライキ　大阪　青兒

米の値もしらぬ息子の左傾なり　滋賀　幽光

軒切りに殘つた地所を持て餘し　大阪　千兩

拜ませてそれで母親機嫌よし　螢ヶ池　百萬石

この人も百圓紙幣へ笑つたり　宮津　靜眼

出て居る。

▽照夫君の「牛のやう」は、原句「やうに」だつた。「結局」は、病床にある人にして云へる句で、如何に死ぬべきか一生を考へずに終る哀れな幸福人が多いのである。

▽白花子君の「欠伸せば」は、痩世帶」が概念的である。痩世帶を文字でなく感じで出す事だ。

▽美玉君の「親方」は職人世話をよくみて居る。散髮屋の親方など殊に然り。

▽三代吉君の「は大工か指物屋の情景。

▽杜洋君の「雪空」は、意地あるもの豈鬼瓦のみならんやの概がある。

▽愛緒君のは「薄い紙」が見つけどころだ。

▽青兒君の「煙突」はストライキで煙が出ぬのが淋しく見えると云ふので平凡だが、流行の煙突男がをらぬ淋しさといふ見方に觀點をかへてみると面白くはならぬか。

▽百萬石君の「拜ませて」は悲つて居る息子に共に信心させて氣を安める母親をよんだものだが、いま少し表現に工夫すれば、母親が躍如とするかと思ふ。「機嫌よし」ではものたらぬ。

▽銀花君も「あゝうれし」と母親を咏んで居る。「銅貨のまじる」に眞情がある。

▽素月君の「お上りの」は、かほる氏の有名な句「大阪は蝶かれかけてもよいところ」といつた見方に川柳の味がある事を研究されたい。

▽拓二君の「目に見えぬ」は概念的でこうした句を新らしい川柳だと思ふ事は誤りである。この見方にたつて、事象を見て、それから受ける感じ、印象を句にしなくてはいけない

（ひろし生）

母面會に來る

あゝうれし銅貨のまじる小遣錢　螢ヶ池　銀花
大京都伸びゆく春の麗かさ　京都　水舟改一正
食卓の淋しく雨のチューリップ　大阪　山月
儲からぬ話ならもう止してくれ　大和　白帝子
お上りの列に自動車さへぎられ　大阪　素月
愛人と歩くに街の灯明るすぎ　高岡　かずま
ひとりもの笑はず今日も森をぬけ　大阪　繁坊
これたかと覗くバケツに眼高の子　京都　禾山
叱るなよ大事な〳〵孫ぢやもの　大阪　靜香
遠足へバス横暴の埃り立て　彦根　香緒縷
とつちめた氣持の寂し春の宵　大阪　柳民
赤兒の聲蛙よ蛙もういゝよ　島根　柳光子
目に見えぬ鎖に今日も引きづられ　大阪　拓二
結構な御自分胃腸病みつゞけ　羽衣　松枝
生さぬ仲無事大學を卒へさせる　廣島　無角
仕事する氣にもなれない春の午後　大阪　詩郎

歸省して

莢豆君の句に「若葉ゆさ〳〵金比羅詣りがしたし」といふのがある。新綠の頃になると莢豆君の郷里の讃岐の金比羅さんのあの若葉を思ひ出す。

私の郷里は兵庫縣の山崎である。山崎といふと、いつでもすぐ「あの與市兵衛」のと云はれるのであるが、猪の出る山崎は京都の山崎で、私の郷里の山崎は赤穗と同じ播州にある山崎である。名の通り山の中にあつて、揖保川の流域である。

欣女の墓のあるお寺の山からこの川を見下す景色は新綠の頃殊にいゝ。

六月の第一日曜にこの郷里に歸つた。病中の母は案外元氣で、大阪の話をきゝたいなどゝ云ふので、地下鐵や、大阪城の天主閣が出來る事、南海の高島屋の話などをした。一月から病床にあつて農村の不況、町の銀行が閉つた事などを少しも知らず、のんきに寢て居る母は昨年迄毎年春秋に上阪して居た大阪の賑かさを思ひ出して居た。

母が佛壇にお燈明をあげよと云ふので佛壇をあけてみたら、私が父の死んだときに供へた短册が出て來た。短歌が二葉と俳句が四五葉あつた。私の廿三の時のものであるがいまからみると字もいまよりうまいし歌にも句にも相當感激が出て居る。私は妙な氣持になつて、病床をはなれた。

部屋にかけられた大町桂月の書「人生は一局の碁の如し」私の心を射た。

（安井ひろし）

書名詠込みの古川柳（二）

竹馬居主人

（8）五　經

四書の次ぎに載すべきであつたのを、こり落したので、一句丈け添えよう。

四書五經縮めて見れば僅五字

五經こは、易、書、詩、禮、春秋

（9）春秋（附）春秋左傳

馬の耳に風周倉に春秋

春秋を周倉よほど聞きおぼえ

本誌上年を重ねて、唐柳短解を載せた尚ほ續けてくれろこの御注文もあり、材料もあるのだから機を窺つて居る。其際周倉の句は始末したい。

毒をつかんで春秋をよんでゐる

事物紀原に、杜預、春秋序曰、春秋者魯史記之名也、孟子曰、晉謂之乘、楚謂之樹机、而魯謂之春秋、專始據此云起自周公旦、百書序、亦曰、孔子約史記、而修春秋。

卽ち隱公から哀公に至る十二公二百四十二年間、周及そが親藩たる魯の記錄にして、孔子の修正筆削にかかる、(6)十三經中に、春秋左傳は擧げた、公羊傳穀梁傳こ俱に三傳こ稱せらる、略しく左氏こ言ふ如く、周の左氏の撰である、本文の各年月の記事毎に、事實ん詳記して居る左傳の英譯はある。

燈臺の雪舞にぬれる史記左傳

船宿で左傳四五卷とんだこと

因に春秋なる言葉は悅ばれたもので日本春秋、甲越春秋、昔々春秋こが出て居る昔々春秋は小本で桃太郎や龍宮の傳說が面白く漢文で書いてある、中井履軒著、神田の古本屋に八十錢位で震災後よく見たのゞ、私は不思議に感じた。

（10）史　記。

司馬遷の撰百三十卷、軒轅より天漢に到る、私は列傳を好むでよむだ。

蚤籠そばに史記だの左傳だの

退私錄に、史記は實錄也、漢書はつく物也、史記の諸傳に相違あるか、實錄也、其の味は長し、諸侯國の風をしらねば合點ゆかぬ事也、本朝の武士一家々々の自讚あり、兩方行合ひてみれば事の外事の

相違あり、それが卽ち實也、もしそれを理に近き方へかたづけて優劣を定めたらば其の子孫の中々合點する事にてはなし

(11) 蒙求

李瀚撰三卷、我が國では王朝時代から採用されてゐた、勸學院の雀も論語をさへづらず、蒙求をさへずるは惜むべし、此の時分の學者皆雀の師なりと、痛罵した人もある。

牛のなく樣に蒙求よんでゐる

蒙求は知らぬ勸學屋の丁稚

勸學屋は池の端にあつた、錦袋圓發賣で有名、

蒙求和歌の事は安齋隨筆に詳に載つて居る。

(12) 唐詩選

扇屋へゆくので唐詩選習ひ

カアフエーへ行くので、何にを勉强して置うなどといふ、高遠な思想をもつて居る青年も知らぬ、尤もオール日本の女給中、一人の花扇は存在しなくもある、イヤ大阪迄主張した女や、バー彼女などが比適するだらうか。『御存商賣物』（黃表紙）に、『向ふより、唐詩選源氏物語、江戸丁扇屋より返りがけ』などこある。

唐詩選みてゐる息子けちなつら

唐詩選から細見へ息子とび

唐詩選よむと孔雀の尾がほしい

唐詩選切賣にする安い書家

唐詩選は李攀龍の撰編といふと雖も、その僞書たるは北山を始め山陽も說いて居る、明末より鄕塾の間に愛せられ、我が國に傳はりしは、德川初期か、服部南郭の校本布及し、講說も行はれた、蒐集された選評眼に就て諸見あるも、兎も角便利な編纂物で、初學者に益が多い、七卷大に流行した樣子は、閑散餘錄にのつて居る。

手柄のように讀むでゐる唐詩選

(13) 文選

細見な四書文選の間によみ

文選を妾そばからひったくり

異朝書籍考に、六十卷あり、梁之武帝之太子昭明之撰なり、古今の能き詩文をあつめたり、唐之李善是れを註す、又五臣注あり、李善を合せて六臣注と云ふ、近年續文選、廣文選の類大明より到來す。

宋朝科場、初沿排偶之習、故有文選爛秀才半之語、（拙堂文話）、卽ち文選を知つて居れば、天下の秀才として半、達したものとされたのだ、然らば時に慰みに細見をみるのも、世情を洞察する料であるかもしれぬ、隨筆壺屻に墨士文人の書たるを棄てて居る、選學と稱し學者の研究する處、我が國にても尊ばれた所以はわかる。

(41) 白氏文集

徒然草に、ひとり燈火のもとに、文をひろげて見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ、文は文選のあはれなる卷々、白氏文集老子のこゝは南華の篇この國の博士どもの書けるものも、古のはあはれなるをほかり

白氏文集は大目に和歌の神

和歌の神は住吉の神、白樂天は追ひ歸さ

れたが、其の文集丈けは大目に、我が國にも爭ふて傳寫された、

（徒然草參考）、唐の白居易がわかき時より、長慶年中迄の詩文をあつめて、白氏長慶集と名づく、五十卷にて五帙とす長慶以後のを加へて七十五卷とし、白氏文集と名づく、經籍志には白氏長慶集七十五卷このせたり、今の世に行はるる書は七十一卷あり、十帙とす、

我が國に渡つたのは非常に古い（仁明天皇の頃か？）、謠曲には專ら轉用されて居る、極めて平明な平易な詩で、恐らく當時の民衆的なものであつたらう、だから古川柳を知らむとするには同集に目を通して置く必要がある、平家物語や和漢朗詠集にも、その詩句を引用した箇所があり、從つて近松は隨所に巧妙に活用して居る。

「紙伯」本誌五月號拙稿「人參雜話」に、戰爭といへば伽羅や沈香から馬蹄銀まで、持ち歸るとのお定まりは、日本勢人蔘倉でつかみやひ、人蔘も御多分にはもれなかつたといふような事を書いた。馬蹄銀を點綴したのは、皮肉過ぎたかも知れぬが、柯公全集にもそんな事が記してあつたと記憶を喚び起す。

名古屋公衆圖書館に於ける、內藤虎次郎博士の「宋元版の話」講演筆記（非賣品）を頂いて讀むと、持歸り品が我が文化に貢獻した、一話がある。

文祿の朝鮮征伐は日本の文化上實に偉い事をしたもので、其の時分朝鮮にあつた古い本と云ふものは、殆んど洗ひ浚ひ皆な持つて來て了つた。……今日朝鮮に行つて李王家の圖書館にある本を見ましても、總督府の圖書館の本を見ましても、殆んど宋元版の古いものはないと云つても好い。只だ一部だけ總督府の圖書館に宋版の本がありましたが、それも大したものではありません。何故そんな風かと申しますと、文祿征韓の時の日本の武將と云ふものが、實に偉かつたと思ふ。本を皆な洗ひ浚ひ持つて來る事を考へた丈けでも非常に偉かつたと思ふ。近年の日露戰爭、或は北清事變の時にも、奉天或は北京邊りに隨分本があり、ましたが、明治時代の軍人は文祿征韓の時の軍人より或は國際的に清廉潔白とでも云ふのか、そう云ふ洗ひ浚ひ本を持つて來て了ふと云ふ事はちつもしなかつた。……文祿征韓の時の軍人は日本の文化を增進させる事に於て今日まで何れだけの効を奏してゐるか解らぬと思ひます。世間では彼の時に加藤清正が一番澤山持つて來たと評判がありますが、清正は田舍ばかりで戰爭してゐたから實際大したものでありません。京城にのり込んだ浮田秀家が一番澤山持つて來てゐるのです然し秀家は後になつて皆な他人にやつて了つた、秀家の奧さんが病氣した時曲直瀨養安院と云ふ醫者に罹つた。其の醫者に皆なやつて了つた、ですから今日養安院藏書と云ふ印

綠雨居小集會

七月三日午後七時より

兼題「孝行」

會費　不要

拙宅で寬いだ小集句會を開きます。別に案內狀は出しませぬから、御遠慮なくお越し下さい。（綠雨）

場所は住吉區杭全町六〇三

の捺された本が隨所にあるが、此れは皆な秀家が朝鮮から持つて來た本で、何れ位ゐ持つて來たものか？大變な數であります。今日上野圖書館にもある、また圖書寮にもある、隨分方々に行つてゐて前田家にも此の種類の本がありますが、何うも此れは浮田家から出たのでないかと思はれるです。

今日では日鮮一に歸し、これらの稀籍と同世帶のものとなり、支那に優つて居る事を喜びたい。

月評 作家展望

路郎　ひろし　素琴人　町二

森田ひさし

1 十圓が身にあまるとは情ない
2 しばらくは他郷と出たが死んだのか
3 不納から消される灯をも子は知らず

素人……君は繪の傍餘技として川柳を弄んで居られたやうな傾があつたが何うして近頃近頃は押しも押されもせぬ堂々たる作家になられた。併し未だ川柳と云ふものに就いて遊戯的な取扱ひ方が全々拔切つたとは思はない。

町二……何の句も個性があるが今一息の感がする。

素人……もう一息とは何う云ふ意味ですか。

町二……相當鋭い素材を摑み乍ら内容がそれ程我々を打たない。一口に云へば餘所々々しい感じだ。

ひろし……(一)の句にしても矢張そうした感がありますれ「十圓が身にあまるとは」はいゝ處を摑んで居るが「なさけない」とあつさり片附け過ぎて居るから作者自身が十圓が身に餘つて居る程情けない生活をして居るとは思はれない。そうした作者の環境と距つた氣持であることが出て居るのであらう。(三)の「不納から」の句は路郎先生の「天井の低さも知らず子は生れ」と云ふ句の前に持つて來れば自から價値が分明する。

町二……(三)の句の「灯をも」の「をも」は再考の餘地がある。

琴人……(一)の句は今ひろし氏が評されたので充分だと思ふ。併し此の作者の立場から見れば、斯うした感じが充分に應へたのであらう。斯うした内容は今迄に隨分云はれて居る。幾何同じやうなことを云はれてあつても自身に深く衝動を受けたものであれば、その衝動の深さを其儘によりよく表現したなら此の句は確かに生きる句である。下五は考へる餘地があるとひろし氏が云はれた。作者によく考へてほしい(三)の句は「灯をも」のをもと云ふ處に議論があつたやうだ。作者は消される灯をも知らずに嬉々として遊んで居ると云ふ處の心を打たれたのであらう。此れもよいものをとらへて居るが定全な表現と思ふ程に云ひ表はされて居ない恨みがある。三句を通じてそうした間伸びがある爲めに第三者の心にぴつたりと來ないのであると思ふ。

路郎……ひさし君とはもう四五年も逢はないと思ふ。從つてひさし君の心境を僅かに句の上から見ると過ぎないが過去のひさし君の環境や性格では、或る種の華さや明るさがあつて生活上から來る惱みとか深さとか云ふものを句の上に覗ふことが出來なかつた。

が其後徐々的に生活を厥ひ作句上に對する一の眞劍を見せて來たので自分としては頗る興味を持ち、其の眞面目な態度を喜んで居るのである。茲に掲げた三句に就いては可成の論難が加へられて來たけれども、それはインテリひさし君としての多くの慾望からの論難であらうと思ふ。尤も（一）の句の下五（三）句の「灯をも」の「をも」が夫等の句の瑕疵であることは辭めない。現在ひさし君の心境がかゝる境地を彷徨して居るとすれば必ずしも將來を悲觀する事は當らないと思ふ。

素人……ひさし君の繪は既に定評がある。何處やら彼の繪と句の間に相似通つたものがあるやうに思はれる。其れは明るさと輕さに於てである。併し前掲の三句は材題が材題だけに彼の持ち味の明るさと輕さが表現を瑕つけて居るやうに思ふ。そして繰返して云ふが彼の繪に於けるが如き眞劍味が句にも表はれん事を切望してやまない。

中野裸人

1 首吊つて死ぬ空想へ父が呼び
2 惡口を云ひにわざ〳〵汽車で來る
3 腹たてゝ嫁に算盤おかして居
4 モガは子を荷物のやうに抱いて行き

ひろし……（一）の句は空想的で突飛な樣ではあるが、かうした氣持になることもあらう（二）の句は面白い云ひ方である。（三）の句は氣短かな父親か或いは眞人の姿が躍如としてゐる。たぶん父親であらうと思ふ（四）の句は現代風景のスケッチと云ふ輕い句である。

素人……（三）の句は勿論父親でせう。この場合の嫁は、娘であつても、息子であつてもいけない。是非嫁でなければならない。「首吊つて」の句は、父より他にもつと適切なものがありはしないかと思はれる。「モガ」の句は、荷物の樣にでは少し重たい樣に思はれる

琴人……裸人君は非常に酒豪である。酒のために一度生命を危くした。その時限り禁酒しようと思つたが、死んでも酒は止められないと、平常も赤い顏をしてゐる。さうした酒の中から閃めいたものが、皆川柳となつて表はれる。そこに非常に鋭いものがあるかと思ふと、暢んびりした樣なのもある。併し常には川柳は深刻なものを詠いたいと云ふ氣持を持つてゐる。この四句は、ひろし君の評で盡されてゐると思ふ。

町二……（二）の句も（三）の句も面白い。之等はこれで完全な句であらう（一）の句はやゝ輕すぎると思ふし（四）の句は、つまらない。今、琴人氏が、作者は鋭い句を心掛けて居られると云はれたが、鋭い句もいゝが、（二）（三）の樣な句に精出されるのも好からう。鋭い句には灰汁の強いものが出來やすいから。

路郎……今、町二君の云つた（二）（三）の境地へ行くと云ふ事は、僕も賛成したい。かほる君が、かほる君の畑を持つてゐる樣に、裸人君がこの境地を自分のものに成し得たら、確かに一家を成し得るだらう。尤つとも、之等の句には、尖端的な強さ、深さ、暗さと云ふ樣なものは、見出し得ないが その方面の鋭さと云ふものは、擧んで得られるものではなくして、自己の環境から壓出し得るものであつて、如何に自分がさうした境地に愛着をもつても、技巧的にさうした作品を生む事は眞に作者を活かすべき方法ではない。かうして、自から出て來る自分の境地をより以上に育てゝ行く、盛り上げて行くと云ふ事が自然であり、又把るべき道でもある

第四句の如きは、單なる見付け所の句であつて、讀者に深い感銘を強ふる事は出來ない

第一の「首吊つて」の句は一讀深刻な感がするかもしれぬが、幾度か口唱んでゐる中に多少技巧的な嫌味を感じさせられる。

六、十……（杏三愚陀筆記）

光耀抄

葭乃選

大阪　壽枝女

人絹の紐する〳〵こそら解けし
エプロンで八百屋の間口ふさがって
すゞかけの下で乘合バスを待ち
ちよつと出れば呑んで歸るこきまつてゐる
ほく〳〵と親子剝いてゐるはぢき豆
玉葱も相手が無いこほつこかれ

東京のお客

東京へ大阪の灯をほめて去に

神戸　茂もよ

おかつぱにしたいこ思ふもつれ髪
生きてゐた甲裴には熱も下り坂
丸帶をしめて出たのは夢でした

朝までは何度時計を見し事か
一日に五分進むを病んで知り
患ふて箪笥で折がついてます

大阪　富美子

そつくりに撮れて娘は不平なり
お師匠になる氣でもない手ゝ忘れ
カナばかりならべて作家新しい
人の子の親こも見えず塚塚
地下室で買つたにしても百貨店

魚崎　吟女

うづく齒へ頁バラ〳〵めくられる
三十の小皺よ六月の陽にまぶし
初夏なれや山羊のなき聲笛に似て

柳が無くならない以上川柳なる名前に累されることは同樣である。矢張り名よりも實である、實質にして優秀ならむか川柳といふ名前から受ける感じも向上するたゞその優秀なる内容を世間が受け入れるのが遲ひ今の所川柳内容の秀でゞ居ることを認める範圍が狹小に過ぎるといふ所に惱みがあるのではないかと思ふ早く大衆をして川柳の優秀さを認識せしめることが吾々のなさればならぬ任務であらふと思ふ。更に内容の向上を計り川柳熟を旺ならしめて川柳といふ名前さへも誇りとして眺め得るの時代を現出せしめねばならぬ。

この意味に於て當社支部のそうだ三十に乗んとする支部聯合して毎年の選手權爭奪戰をやるから一名宛選手を出して覇を爭ひ其優勝者に優勝カップを與へんとする、これにして實現せんか隨分人氣の集中を見ることであらふと思ふ、同時に幾多の名句名吟が得らるゝ事ならん。そして年と共に盛大さを加へ自然の勢として川柳内容の向上を來すと共に柳界を旺んならしむること尠少でない と信ずる。支部の方々は更なり大方諸氏の贊成を得て實現する日の早からむことを希望する。

思ひ出るまゝ大体の方針を書付けて見る諸賢の是正されんことを。

一、毎年度各支部一名の選手を發表する
一、各選手は投句の形式に依つて覇を爭ふ

さて手傳ふて貰ふ氣もないにぼやき
マダムの肩に流れる單羽織

大阪　房子

筍の尻を切る度値を下げる
良い鯉が有つた味噌を買ふて來る
今日もまた母が情けの團子汁
澤庵へ子等の齒音も賴母しく

泉南　ナヲミ

言ふ丈けは言ひ返したが泪が出
かけてゐるこはぜへ肩の息をつき
よいしめり母と畑の草をひき
嫁さおくれ同志やっぱりうまがあ

大阪　機見女

輕氣球ア、サ、ヒ、ビールとのびてゆき

奈良にて（二句）

新婚の姿露はな三笠山
チョコレートも食べて神鹿まして居

螢ヶ池　あざみ

父の死について（二句）

夢に見た父もやつぱり死んでゐた
不幸者御送りもせず病み續け
高熱が續いて植木ほつこかれ

螢ヶ池　紅蔦

たつた一輪咲いて女のやかましさ
蟬の聲知らぬ都會の子に育ち
校友誌又同窓の一人缺け

螢ヶ池　かつ美

水あびの小鳥へ木の葉たわむる
蚊帳をつる事が嬉しい女の子
主婦ぶりをまねて元氣ならりはら

大阪　武子

きゆりもむ中に夏の子をあやし
こび石が有つてもめかけしたしまず
せつかくの宿にラジオの在る住居

螢ヶ池　伊勢子

さてあへば話も出來ぬなつかしさ

一、審判（選者）は編輯局同人諸氏主幹が審判長
一、一支部平均十名のメンバーを有すると見て各自五十錢の出金に依り三十支部にて大約百五十圓のカップ製作費が出來る
一、各年度年度のチャンピオンホルダーの名前及其所屬支部名はカップに刻して永久に其名譽を止む
一、カップは持廻り（爭覇戰記錄と共に）
一、優勝三ヶ年連續せる場合カップを贈る、等々

「海士」に就て

森　東魚

花菱君の例會席上講演中
「今出た海士の荒い鼻息」
に就いて、前號にごなたか「海士とあるから、男ではないか」と云ふ質問が出てゐたが、本來の字義に就いては深く調べた譯ではないが、此の句の場合は「女」でなければ味が乏しい。そして「海士」を女の場合に用ひた例としては、同じ武玉川初編に
婆婆々が昔は指折の海士
と云ふ句がある。即花菱君の說は誤ちでないと信ずる。（六月十九日）

川柳辭典を讀む

森　東魚

最近草薙金四郎氏の著、川柳辭典を一讀する事が出來た。差當り思ひ付いた事を申述べてみたい。

○あさ草餅

淺草名物櫻餅である――とあるが、櫻餅とは違ふであらう。櫻餅は向島の長命寺の名物で、物が違ふのだと思ふ。

○あたけ丸

慳氣する事。このみ說明してあるが、成程この例句では、猪牙舟に對し、あたけ丸を持つて來たので、慳氣する場合には違ひないが『あたける』と云ふ言葉は、氣に入らぬ事に對して當りちらす意味合ひであるから、本來のあたけ丸の事と、併せて『あたける』の意味とを簡單にでゝ說明せねばなるまいと思ふ。慳氣でない――あたける例句には、

勘三が留場引いて出るあたけ丸

があり、本來のあたけ丸の句では

船のたゞ伊豆へ行かうと里心

などがある、これ等を說明せねば不充分である。

○おものし

給料で庸つてある着物縫女をいふ。であるが、普通の者の衣類を仕立てる者には、御物師とは云ふまい。これは、高貴の方々の衣裳を仕立る云はゞ御用仕立屋である。恐らく男であらう、例句のお物師のふき殼一つ氣が違ひ

座五が、さう云ふ重大な仕事をする者であるからして生きるのだと思ふ。

○貝合せ

女子同性慰安行爲。と云ふ說明は簡にして要を得て居るかも知れぬが、矢張り其表の意味合ひの貝合せと云ふ本來の遊戯に就いて一言して欲しかつた。

○烏　丸

淫奔女の事、こだけ說明してあるが、『烏丸枇杷葉湯』か其語の原である事を書き添へて貰ひたかつた。『枇杷葉湯の裾つぱりあまめ』なごと云ふ言葉は洒落本に散見する所である。

○客　分
上等な居候である——とだけあるが、外に嫁にきまつた女が、正式の結婚披露をしない間、婚家へ來てゐるのを云ふ場合がある。其例句には、今、修辭がごうであつたか忘れたが『もう客分で置かれない腹になつた』と云ふ意味の句がある筈である。

○けなるがる
辛氣がる事、悶々する事。とあつて間違ひとも申されないが、寧ろ、羨ましがる事と說明した方が分りが早からう。

○七十五日
初物を喰へば七十五日長生きするの俗諺により色々に使はれてゐる語。
とだけあるが、外に『人の噂も七十五日』と云ふ俗諺によつた用語である場合もある。即例に擧げられた
新枕七十五日　はづかしい
二夕月と十五日嫁はづかしい
の二句は其例で、初物喰の方の意味ではない。

○十五日
六月十五日の山王の祭、九月十五日の神田明神の祭は間違ひないが、其外に單に十五日と詠んで梅若の忌日三月十五日を意味した例句がある。それを附加ふべきであつたらう。其例句としては卯木氏の川柳江戸妙子に左の句があげてある
二夕樽の酒屋も見える十五日
一年と渡しかけ合ふ十五日
十五日梅若の方かき曇り
十五日此處で拜めと土手で云ひ

○しやうきさん
墮胎藥？とあるが、之は確か正氣散の字が當てゝあつて、風邪藥である。例句
女島間引く藥はしやうき散
と云ふのから、著者は『墮胎藥か』と思はれたのであらう。然しそれは、女護島は南風が吹くと姙娠すると云ふ俗說があるから、だから、風をひいて姙娠するなら、風邪藥で墮胎できるだらうと云ふ馬鹿々々しく持つて廻つた句の趣向なのである。

○町　醫
『ちやうい』と讀ませてあるが、私は恐らく、町醫者の略で『まちい』と云つたものだらう、と思ふが如何であらうか。

○てつぽう
下等賣女の事のみしか例を擧げてないが、河豚の意味の說明も書添ふべきである。即ち
鐵砲の皮をくれろと三杯目
なぞを例句にあげてよろしからう。

○とうしん
燈心を飲むと孕まぬとの俗說がある。
として、
燈心を誰に聞いたか嫁は飲み
の句をあげてあるが、私等は小供の時、肥つてゐる女の人が、痩たけりや、燈心の三杯酢をおあがり、などとからかはれて居た事を記憶してゐる。此の例句も其方らしく思はれる。即ち初々しい嫁の肥るのがいやで仕方のない小供らしい心持ちを詠んだ句と考へられるが如何であらうか。尙、燈心本來の用途に於ける例句もあるのだから、その方も擧げて置かね

ばなるまいと思ふ。即ち

燈心を焚付けにする五十丁▼

熱さうにともる向ふに並んでる

其外、百物語の場合なども差加へた方が良いであらう。

○のび

あくびの事。と説明してあるが『あくび』と『のび』とは伴ふ場合が多いのだが『のび』だけする場合もある。要するに疲れたり退窟した場合、腕をウンと伸ばす場合であるから、單に『あくびの事』と云ふ説明は當らない。

○みなるきん

巳成金。私等は『みなるかね』と聞いてゐた。何れが正しいかは知らないが——尤も、オレは成り金と讀んだ馬鹿話もある——呵々。

○よだか

『よだか』『よだかそば』と兩方とも濁つて讀ましてあるから誤植ではないだらうと思ふ。江戸見物の田舍者が土産に買ふのが多くはあつたかも知れぬが、江戸の人々だつて、毎月々々新版の役者の似顔なぞは、待ち戀れて買ひに行つたものである。吾々の小供時代にも、五代目菊五郎の梅幸百種などは、ポツ〳〵出版さうと思ふ。東京では『よたか』と澄んで讀む。恐らく江戸時代にもさうであつたらうと思ふ。

○繪草紙屋

錦繪等を店頭にぶら下げて田舍者相手に商賣してゐた店。

と説明されてあるが『田舍者云』は蛇足れて、伯父が遊びに來る度に、一枚宛土産に持つて來てくれるのを樂しみにした覺へがある。兎に角、江戸の女達などは、隨分錦繪を大騷ぎしたやうである。其外小供相手の新版何々と云ふ類は、次から次へ新趣向を凝らして出版されたの

粒々集

御影　長崎柳秀

恐縮の猪口は兩手にしかこうけ
旦那とは別に女將は兒をはらみ
風車笑うた顔が目に殘り
繼母の云ふがまゝなる襟の色
床柱醉ふた丈けでは物たらず
からこうた後の涙を拭いてやり
苦勞性なにを食ふても身に附かず
信心の心になれぬ運のよさ
本心になるは電車の無い時刻

松山　前田五健

平襟の色の加減か夏痩せて

減俸に反感もなき餘生なり
之れだけの用へ出張五六人
呉服屋に任せて三味を彈き續け
税金が來て釣の氣を亦た起し
顔と顔まん中あたり螢籠
子の繪本ヨタも交つて讀んでやり
親指を吸つて寢た兒へ枕蚊帳

東京　富士野鞍馬

水蜜を剝いてハンカチ見當らず
この宿のごこの室にも同じ筆
セルになり麥稈になり矢の如し
床の物みな置替へて日曜日

かであるら、前記の説明は、書き過ぎだと思ふのである。

○をくり膳

病中枕許へ運び來る膳部のこと。とあるが、之は、招待した客の中で、病氣其他で不參の者があつた節、其人の家へ、膳部を屆けるのを云ふのである。

○ひやく助

玉代百文の安女郎云々と賣女だけの説明になつてゐるが、化粧品、確油であつたと思ふが、それを賣つた店百助がある

例句に

百助をごう思ふ氣か下女は買ひ

と云ふのがある。柳雨翁の『江戸名物』に確かに百助の説明が出てゐた筈である先づ、ザッと見渡した處氣の付いた事を申上げた。が、其外に、著者が序文に申された中で私の不滿に感ずる所がある、即ち左の一節である

——萬葉や源氏と相對死した博士の名は屢之を聞くが、未だ一人の川柳と情死した學者の名を聞かない——云々

これは、ごう云ふ意味であるのか、世間に聞えた博士とも云はれる人々で一人の川柳研究者もないと云ふ意味なのであらうか——文學博士と云ふやうな人の中には無かつたかも知れぬが、川柳界には、我が、今井卯木氏の如き、死に至るまで全く川柳と情死した、立派な人があるではないか、又、西原柳雨翁としてもさうである、川柳に關する著作に沒頭せられつゝ逝かれるのである、最後の著、柳樽初編の評釋が岩波書店から出版せられたのを、病床に聞かれて、微笑して逝かれたと云ふ事である——かゝる斯道の篤學者があるでは ない 。尚又、法學博士岡田朝太郎氏、即ち、三面子翁は恐らく一生涯川柳研究を捨てられないであらうと思ふ。又、多少意味こそ違へ、三十年來、全く總てを川柳の爲に捧げてゐられる阪井久良岐翁の如きがある——これ等の人々に對してゞも著者の序文の言葉は、當を缺きはせぬかと思ふのである。殊に、卯木氏や柳雨氏に對して私は、著者の此の一句に不滿を抱くものである。更に、著者自ら川柳辭典の一甲矢である事を自負されて居られるやうであるが、川柳辭典樣のものとしては、既に、著者が、その著の中に引用せられてある、外骨翁の川柳語彙がある、又、一冊に纏まりはしなかつたが、柳雨氏の川柳辭典がある、その一部は『大正川柳』の附錄として、更に『鯱鉾』の附錄として何回か發表せられてゐる。且又、川柳の辭書の部分的草稿とも云ふべき、難句や難語の解は、五月鯉、獅子頭、青柳、鯱鉾、花束、川柳詩、よのころ等の諸雜誌に、毎々發表せられたものがある。それ等の先進の努力に對して一言及んで頂き度かつたと思ふものである。然し乍ら、此の著によつて、柳界は益する所少しとしない。著者の努力に對しては、同じ道に精進する私は、謹んで敬意を表するものである、而して、より良き著一の著者の御奮闘を祈るものである。妄言多謝。

（昭和六、六、五、大阪假寓に於て）

一路集

（募集句）

蠅

麻生葭乃選

蠅叩きそれて天井に笑つてる　青水
蠅曰く人間よりも恐い蜘蛛　沒食子
蠅一ツ二ツへ母の手は延びる　黑天子
陳列の中へ出て來た冬の蠅　水郎
斷りは蠅によく似た揉手をし　凡々
本箱に去年の蠅か堅うなり　水車
おとものする蠅が背中に二三匹　蕃惠子
たまたまの御馳走蠅もよつてくる　松枝
蠅驅除のポスターに蠅とまつてる　幽光
つぶされた蠅戀人が有つたろに　一正
食ふことの蠅の姿に省みる　相界
蠅一疋白魚の手にしめられ　無角
挨拶の御辭儀へ蠅は塲所を變へ　素月
蠅叩き名人格に在る父よ　靈竜
蠅ならばいつも食事にお集り　靜香
蠅のゐる部屋へ歸つておちつかず　柳次
蠅取紙一番先に蝶がつき　あざみ
人間が蠅一匹になぶられる　銀花
掃切つた座敷に蠅の淋しさう　苦茶坊
温室に蠅一疋がやせて居る　耕民
飾窓蠅の腹見ておもしろし　哲郎
蠅叩きしばしは餘裕見せる蠅　白帝子
蠅じつと天井に明日の朝を待ち　吉絃堂
蠅うなる氣味の惡さに道をかへ　愛緒
知らぬが佛蠅がたかつた物をたべ　不路子
お毒味を蠅がして居る料理臺　柳秀
蠅たゝきとれば二つの慘死体　一久
一度位蠅の生活して見たし　義郎
魚干せば隣の蠅もやつて來る　香緒纓
膳の上營養不良らしい蠅　樹光
預つた赤子へ蠅は戯れる　洋々
近道の行手遮る蠅の群　夢裡
蠅またも元の所に舞戻る　ぎさん
病む目先蠅取蛛蜘の健氣ぶり　鯉友
貴婦人と知るや知らずや止る蠅　泉流
ルンペンの悲しさ一つ蠅を伴れ　民郎
蠅拂紙止つた奴を背のぴさせ　珊瑚樓
電燈を航空母艦の樣に蠅　艸樂

續川柳家の戸籍調

◎　係　山雨樓

（一）姓名（二）雅號及別號（三）出生地（四）現住所（五）生年月日（六）職業又は勤務先（七）好きな句（八）自信の句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者及子供の有無（一一）きらひなもの（一二）川柳に手を染めた年月

（267）　早川聽松

（一）早川睦造（二）無弦庵聽松（三）「立ち別れ稻葉の山の」の附近鳥取縣岩美郡宇倍野村大字高岡（四）鳥取市大字西品治（五）明治十七年九月九日（六）目下失業狀態（七）お互の世にせうこして角が立ち（路郎）泣くなこは君もやつぱり他人だね（杏三）迚も擧げ盡せぬ（八）噂りやあんな氣分になぜなれぬ、自轉車に乘れぬだけでも世に遲れ（九）俳句、繪畫、旅行、蒐集、但しどれも實行せず（一〇）有り子供は姦しいの上にも一人（一一）冷い人、新しい女、勝負事、（一二）明治三十八年の冬頃

（263）　藤堂十紫

（一）藤堂孫一（二）藤堂十紫（三）滋賀縣（四）市外吹田町二八一八（五）明治三十四年一月一日（六）官吏大阪中央電信局（七）南窓極道らしく爪を剪り（南北）漬物を切る物音がよそでなし（水府）（八）「呉服部で亭主眼の向けどこがなし」小豆めし聞

見て貰ふ寢顔の蠅を追うてやり　了念
ごう迷うて來たか電車の中の蠅　無鬼
青蠅のひねもす食つてあきせず　盛白
はい出した蠅をも一度叩くなり　鶴峰
いつちよい干魚に蠅の卵を見　暢山
しつこくてよくもこんた強い蠅　白花子
二三日つゞくぬくさに蠅が殖へ　憲坊
大盡寢ぢーゞ〳〵廻る蠅取器　普天
蠅の舞ふあたりに一つ子の玩具　奇可愛
水道をひねると皿の蠅か逃げ　繁堂
冬の蠅日向へ一つ飛んで來て　利生
吾が病蠅はいづこで捨つるやら　鬼石
蠅くすべ煙る市塲のにぎやかさ　明晴
麥飯にたかつた蠅も喰べさうだ　明珠
蠅人らずきせて世帶に無駄がた　方眠
蠅の事なんぞは長屋知らぬやう　榮壽坊
病室へ迷うた蠅へそうが〻り　水馬
牛の蠅飛び替へて見ても牛の背　有爲郎
御破算へからかふ樣な蠅がさび　桂枝
打ち捕つた蠅を團扇へ寄せ見る　しこし
寒蠅の姿が俺になつて來る　巧笑
蠅にまで攻められる身を淋しがり　秋月
退院の日は蠅にさへ嬉しくて　六華
前足を揃へて蠅の拜むやう　百萬石
憎まれてること蠅は知らぬなり　官八
魚がしを蠅に追はれて通り坊け　奈緒美
ショウウインド蠅はぢかれて居る　狂兒
切込みの氣合で子供蠅を打ち
食卓に蠅滅相な戀をする　沙門

蠅よ來い遊び友達ごもならう　久夫
蠅叩きたゝいてならぬ上に居る　英賀夫
蠅入らずを下げて引越し別れた來　魚郎
蠅取をつまづきさうによけてゐる　今雨
蠅取機丁度蜜蜂飼ふ如く　土筆
蠅ついに團扇汚して叩かれる　鐘生
銀蠅が一匹室を迷うてる　清光
羽の無い蠅が足まで上つて來　黑ン眸
死切れずくるゝ〳〵蠅は金魚の餌　葉光
啞の娘のうつとり見てる蠅の戀　靖弘
交番は蠅のたかつた樣な人　青兒
大廣間蠅うか〳〵と迷入り　いわを
糞蠅が二人行くに舞ひ上り　三碧
逢ひに行くのか蠅のおめかし　晃卓
貧棒に馴れて蠅なご面白し　沐天
つまみ食ひをを蠅が見付けて來　木偶人
おりを出てばら〳〵に飛ぶ牛の蠅　裸人
蠅を殺して人間は閑　二南
何を得るつもりか蠅がよて來る　湖山
一匹の蠅に食事の亂される　機見女
疊替して蠅までもうれしさう　突破坊
飯時の蠅にも馴れた嫁が盛り　スエノ
蠅一つ裸の晝寢起したり　宏朗
重役のまわりうるさく蠅のゐる　星光
何よりも蠅を怖れる母なりし　忠彌
新聞を讀む間女房蠅を追ひ　掉二
二三匹叩くと蠅はみんな逃げ　菊路
立てかけた琴が響いて蠅が取れ　失名
子の顔でなければ叩く蠅だのに　双車

けば女房の誕生日(九)謠曲ぐらゐのものです(一〇)妻あり、男兒一人(一一)特に嫌ひなものとてありません(一二)大正十五年。

(269)　平井蒼太

(一)平井通(二)蒼太、耽好洞人(三)名古屋市(四)大阪北河内三郷村西橋波(五)明治三十三年八月五日(六)市電氣局の勞働者(七)本誌の毎號に必らず二三句は好きなのがある程で一句を擧げるに苦しみます(八)課題吟を除いて總てのものに私は私としての自信を持たぬ句はありません(九)軟派風俗の文獻的探求、猥談(一〇)有、子供二人(一一)性慾を唄ひ得ない作家(一二)昭和四年十一月。

(270)　名越不然

(一)名越由人(二)不然(三)德島縣池田町(四)神戸市大石一五ノ九(五)明治二十九年一月十八日(六)商店員(七)東洋鬼氏の句。路郎氏選の中に好きな句多し。きぬ〴〵のあとは身になる一ト寢入り(古句)(八)とけいのよろこび眞白きかひな、尙齒會天壽の顏のまち〳〵や(九)友と語り友と酌む(一〇)妻一人子一人、あとは見込なし(一一)チイチクパアチク、喋る女(一二)昭和四年三月はじめて川柳雜誌を見る、句會は昭和五年五月十一日神戸新聞社川柳大會より。

(271)　阿部佐保蘭

こりもちにおりて悪運つきし蠅　詩郎
蠅叩き損ね危い金魚鉢　山月
蠅のたつ後へ後へと手が伸びる　可章
蠅たゝく音にもヒスの聲がする　俊朗
一歩も退かずと蠅の死んで居る　道樂
蠅たゝきヒラリと命拾ひする　白柳子
遠慮するお膳の蠅をうかと追ひ　木馬
十分の食事へ蠅はとんで來る　四五磨
蠅を追ふ役がとう〳〵喧嘩をし　雅幽
蠅を追ふ手があやまつて酒をぱけ　おさむ

糸屑

糸屑をつけて母親せはしがり　裸人
糸屑をちらして遊ぶ母の傍　黛
襟を直して糸屑を拂ふてくれ母　ぎさん
糸屑を丸めてゐると歸つて來　おさむ
丸めては見たが糸屑用もなし　利生
糸屑を丸めまるめて電話口　有爲郎
糸屑を丸めて妻は向きなほり　奇可愛
糸屑に晴着一枚ふへるなり　義郎
糸屑を取つてやろうかモーニング　長次
糸屑をとつて小供に用があり　鬼石
糸屑がついてゐるとは知らされず　憲坊
糸屑を丸めてさアさ　お乳です　普天
糸屑の中に女工の甲斐〴〵し　泉流
糸屑のままで逢いたい許嫁　民郎
糸屑へ心決めたように立ち　道樂
糸屑のあつさり振けて短かすぎ　木馬
母の氣へ糸屑すら〳〵振け　同

稼がねば蠅もひもじうなつて來る　光路
人位
捨てに行くとこまで蠅はついてく　おさむ
脱ぎすてた妍めかしさへ蠅のよる　光路
蠅とてもりんきの膳へよりつけず　雅幽
地位
蝿共が萬年床と知つて來た　香緒縷
人間の手をまた蠅はうるさがり　勝二
天位
君の蠅我につきたる別れにて　閑生

高橋かほる選

糸屑の中へしやべりに來る隣　勝二
燒き芋へ糸屑と來る日の長さ　青水
お針子の糸屑だけは置いて去に　暢山
糸屑のいつから附いた棕梠箒　苦茶坊
糸屑の晴着について憎がられ　巧笑
日向ぼこ裾の糸屑ふと見つけ　六華
糸屑で一寸しるして洗濯屋　山月
手仕事の母糸屑を間に合せ　美和子
先生のマスクから糸屑がたれ　可章
糸屑のままで赤ん坊抱きに來る　水車
好い柄をほめ〳〵糸屑とつてやり　町子
嫁入の支度糸屑美しく　方眠
糸屑を丸めて女房あくびする　鐘生
糸屑へ風船玉を持つて來る　靖弘
糸屑を選つてボタンを附けくれ　水郎
糸屑の溜つた頃に初産し　凡々
糸屑の口に默して女居る　宏郎

(一)阿部潔 二櫻花洞佐保蘭(三)京都の西陣(四)東京市小石川區初音町四(五)明治卅九年十一月十二日 六)京染吳服白生地卸小賣商 (七)人を捨てゝ人の戀しき影坊子、身内より他人があつて秋の暮、春の夜は夢の中へも雨が降り 雀郎 八)鶴の姿の明方になつてゐる、朝の濱歩けば逃げる蟹がゐる、家 は夢の話へうちこける(九)將棋、圍碁、麻雀、歌舞伎見物、座談 日向ぼつこ、海岸の散策(一〇)なし(一一)無責任な人、ぶる人(一二)昭和二年九月。

杭全町
MEMO
雨緑

▼安井ひろし君は五月七日同郷會の主催で椹保川で鮎狩りを催されました。同夕方欣女の墓に詣でゝ九日歸阪されました。

▼福田山雨樓君は六月三日 本社神戸支部の句會席上で「川柳の藝術性」と題する講演をされました。同君の令息は病臥されてゐられるので本號の編輯に出席されたがすぐ歸宅されました。一日も早く全快を祈ります。

▼中島鐵洲君は因幡神話「うさぎとわに」の玩具を考案されました。それは六月十二日から十日大阪で開催された十八回商工展に入選したもので實に風雅なもので、一般の希望により分讓されるさうです。一箇三十錢送料

糸屑をよりわけてゐるつゝまし　機美女　白帝子
ポケットを探れば糸屑らしい感　スエノ
糸屑に嫁の在所を尋ねられ　三碧
糸屑を丸めお針子今日も暮れ　いわを
糸屑へ母ゆる〳〵と話出し　英賞夫
糸屑をまんまるくためてゐる娘　魚郎
糸屑の手近の紙へのせられる　夢裡
糸屑を拂つて母は膳へ立ち　忠彌
糸屑の中に傳明のプロマイド　松枝
糸屑に親しさ見せてお針退け　桂枝
糸屑を焦がした匂たづねられ　禾山
糸屑の中へ大きふのみが逃げ　水馬
フロックの糸屑とつてやるも　星光
糸屑のほこり春のひざ舞つてゐる　白柳子
糸屑がついてきゐるピクニック　黒天子
糸屑を丸めて嫁ぐ日を想ひ　樹光
糸屑へ男うかつにすはり込み　土筆
糸屑へ器用を見せて女の子　沐天
糸屑もつけてゐれしやセルを着る　棹二

糸屑をかんで桃割笑ひこけ　黒天子
糸屑がくすぶつてゐる客火鉢　没食子
（佳）糸屑の中へ忘れた請求書　新水
（佳）糸屑がついて戻つた出前持　同
（佳）三階を掃けば糸屑ゐふ飛び　木偶人
（佳）絹糸の屑を女の子が集め　同
（佳）糸屑にわが子のきせた事を知り　水馬
（佳）糸屑を氣がある樣にこくてれ　光路
（佳）糸屑の女心へ殘されて　同
佳）家計簿もつけ糸屑の箱もあり　明珠
糸屑もついて緋が送られる　奈緒美
（地）
逢ひながら聞けば糸屑なぞ拾ひ　春秋
（天）
糸屑へ氣嫌のなほることを云ひ　二南
（軸）
まじないの樣に糸屑しまはれる　かほる

職人

光路　選

◇

風呂からの歸り木遣が口へ出る　素月
職人の癖前借に馴れてゐる　スエノ
目蟲立ち法被に惜しい男なり　利生
職人の腕に自信の返事なり　秋月
新世帶持つて職人落つけず　繁堂
大工今歸れば妻と二男二女　有爲郎
職人の目にも歪んだ世相なる　皐光
前借りをして職人はのんでゐる　方眠
能辯な職人業の伴はず　松枝
夜業して明日を便りに生くる職　壽惠子
職人の今日腹掛けの香ふ色　湖山
國旗出す日を働いてゐる職人　没食子
職人の火鉢いらけてから返事　相界
焚火きえかけて職人やつと立ち　奈緒美
口下手なことも職人らしいなり　沙門

中見光路
木村晃卓　共選

▼川柳至誠會の主催で川柳漫談會を催されました。本事務所樓上で六月十一日夜至誠會社側から路郎先生、萬よし、琴人、番傘川柳社側から水府、塊人、吉丁。至誠川柳會側から樂居、多聞、一稻の諸君が熱辯をふるはれ近頃にない珍らしい催しでありました。

▼平井蒼太君は病氣で大阪市電氣局病院外科へ入院されてゐられます一日も早く全快を祈ります。

▼河野双車君は路郎先生の命名で夜王と改號されました。

▼かほる、新水、里十九、啞聲の諸君は六月九日淡路の岩屋へ吟行されました。

▼竹田芦穗君は五月廿八日淡路洲本から「パレットを空しく濱の松をぬけ」の句を寄せられました。

▼小寺鳴玉君は五月六日目出度く結婚されました。

▼出口雨町君は都合で退社されることになりました。

▼淺井冷々子君は松山支部の創立當時から多大な盡力下されましたが今回家事の都合で退社されることになりました。一日も早く復活を望む。

▼白柳子、哲郎、とも坊、清光、柳甫、双車、主税の諸君は六月一日攝津耶馬溪へ吟行されました。

▼都藤冷笑君は古木と改號されました。

▼川柳すぎ笠會では七月五日午後三時から日本ライン犬山城内凝燿亭に於て創立一周年紀念會を催されます。

▼横濱貿易柳壇の一行は五月廿四日松竹蒲田へ見學に行かれました

▲ふあすと川柳社では六月六日夜創立三周年紀念句會を催されました。

▼大阪川柳社では六月十三日夜更生一周

夜遊をする職人の下駄の減り　山月
かんな屑脊中へつけて畫がすみ　柳次
職人の煙草もながく日も永く　桂枝
減給の晩を職人醉ふて居る　棹二
いゝ腕があつて職人懶けてる　菊路
職人へ御前氣輕う話かけ　三碧
鼻つ張り強く職人啖呵きり　夢裡
職人の妻は其日を案ぜられ　四五磨
學窓を出て職人になり切れず　白帝子
變人なだけに仕上げがうなづる　鶴峰
職人のせめての見得は髪を分け　木馬
職人の少しはわかる朝鮮語　水馬
菜葉服暗い共同栓へ起き　士絃堂
その腕と別に酒癖悟しまれる　忠彌
職人の人差指はいびつだつた　舟路
むつちりとして職人の腕の冴え　百萬石
棟梁へ前借をする子が生れ　英賀夫
職人の手際は通る人立たせ　鯉友
職人は月夜を欠伸して歸り　民郎
職人のかたぎだなんていふてる　義郎
職長になつて罷業が嫌になり　憲坊
滿員へ法被遠慮のない話　無鬼
手に職は有れど仕事がないなり　不蹈子
棟梁がだまれば皆な腰を上げ　耕民

佳　句

彼奴まだ手間を稼いでるさうな　可章
職人といふ氣輕さの辨當箱　青水
職人の冗談聲が大きすぎ　双車
鉋研ぐ朝の大工の惚氣かな　靈壺
職人と云ふ名で膝を崩して居　奇可愛
職人へ今日のおかずが氣に入らず　魚郎
ちと腕に自信が足らず金を貯め　勝二

（人）

脱殼となつて職人老いてゐる　沐天

（地）

資本家の目に職人の手がにぶし　明珠

（天）

棟梁の股火へ鉋屑が舞ひ　靈壺

拙　吟

咄す種きれて居職の夫婦ぎり　光路

◇　晃卓選

職人の目にも歪んだ世相なる　星光
模範工不景氣なんか怖がらず　官八
職人のぶつきらぼうにものを云ひ　方眠
弟だけ職をつけると父は言ひ　俊郎
職人へむさぼる如く春の過ぎ　百萬石
棟梁の股火へ鉋屑が舞ひ　靈壺
見込まれた弟子案外の望みあり　松枝
つき合ひがよ て職人金がなし　四五磨
棟梁へ前借をする子が生れ　英賀夫
鼻唄でする職人の手が進み　白柳子
職人へ丼めしの湯氣が立ち　裸人
棟梁と云ふ鋸の音をさせ　おさむ
親方となつて頭もひくゝなり　突破坊
職人は休みの多いのをなげき　明珠
先生になりますと云ふ大工の子　有爲郎
職人であつたを社長誇りなり　泉流
職人の腹を見ぬいて酒にする　民郎

年紀念句會を催されました。本社から琴人、かほる、鶴峰の諸君と私が出席しました。

▼昨年夏好評を得ました納涼川柳動物園句會に就て問合がありますが、本年も差支へなき限り八月上旬に催します。

▼本號の編輯は路郎先生、琴人、町二、杏三、亂玩、愚陀の諸君と私とで致しました。

前號の正誤

▼六一頁「賞」三等川柳雜誌一ヶ年分とあるは六ヶ月分の誤りに付訂正▼四七頁「パジヤマ着てスリツパ履いて妾なり」公二の句にあらず▼五〇頁「入れに來ぬ入鹵の型の淋しく」路鳥▼前號一頁「春すぎて」の一句は象牙の塔に於ける作につき訂正。

螢ケ池支部より

—これを本社の諸先生がたに捧ぐ—

龜井愚龍

將に創立五週年を迎へんとしてゐる吾々の支部は今健在に動きつゝある。靜かに先人の歩いた過去の柳誌を繙いてみると、そこには幾多の柳人が、それは或は柳人と呼ばれるべき人々ではないかも知れぬ。がそれらの無名の數多き人々がわづかに歩いた人生、荊のみち。或は虹の如く、陽炎の如く、わづかに數句を遺して故人となられし人々のあまりの多きに、その變遷のあまりの激しきに、吾々は人生そのものを深く考へさせられずには居られない。

人云ふ、近來螢ケ池の句は病身の故を以て思想的にも不健康であり句も亦暗いとこの言葉は吾々に當つてゐるようにも思はれるが病身の故を以て思想が、どうのと云はれるに至つては彼等のデマのようにも考へられる。吾々はこゝでこのことに付いて多くを云ふまい。いづれ他日の機會に言へる時がある

職人をかゝへて賣れない日を送り　晋天
賃金も同じ職場で彼は貯め　暢山
つかへてる樣に職人頭掻き　菩茶功
氣前よくつかひ職人それでよし　無鬼
職人の醉へば度胸を見せたがり　哲郎
職人をつれて材料仕入に來　山月
職人の癖を親方見逃さず　可章
サイレンにほつと職人背を押し　狂兒
職人の腕惜まれる酒をのみ　沙門
熒火消えかけて職人やつと立ち　奈緒美
遊んで居るにはをしい職を持ち　柳次
職人の手をもんで居る祝酒　素月
職人に過ぎた女房猪口を受け　凡々
職人は指の太さへ生きて居る　今雨
ちと主義があつて職人佗びし居　沐天
減給の晩を職人醉ふて居る　掉二
貸越になると職人また休み　菊路
職人が違ひますよとまけぬなり　學窓
職人を出て職人になり切れず　白帝子
職人へ旦那の顎が空を向き　禾山
職人の腕に自信の返事なり　秋月
職人に惜しい立派な髭を持ち　憲坊
職人にちと不似合な趣味があり　道樂
明日は明日職人今日を飲んで居る　鶴峰
職人の體裁でない手の動き　木馬
職人としての頭をほめられる　巧笑

職人のまこもに向けば疵があり　相界
植木屋の松へ登つて日が暮れる　耕民
サボルんでない鉋磨いて居る　水車
何んの職人風情が金を貯め　可愛
もう三日經てば職人働く氣　双車
職人の今日母と居る天守閣　利生
設計はごうであらうと掘つて居る　三碧
職人へ御前氣輕う話しかけ　青水
上棟式正座に目立つ指の節　沒食子
職人で暮す手相になつて居る

共鳴三句

職人の自慢に賣れぬものがあり　スエノ
子の腕へ職を仕込んで落ちぶれる　勝二
變屈を通し名工老ひて行く　桂枝

（軸）職人の頃の逸話と向疵　晃卓

選後　一人一句抜きの考へでしたのにどうも私の思ふ職人が少なく句想は非常によく共鳴されても句としての まとまりがなくたつた一字の 添削に私の思ひ通りまとまるものも ありましたが實は先般某誌への私の句が一字添削されたために 句意が現在と未來に變つて 居ました計りでなく私はそうして發表された事を 非常に不快に思つて居ますこれなど 選者として考ふべき事だと 思ひましたので今回は特に作者の意志を尊重して全没者を 多く出しました事を遺憾に存じて居ます。

だらうと思ふ。少なくとも吾々自身にあつては吾々の思想が不健康だとは思はない。成る程吾々の句は暗く貧しい句であるかも知れぬ、またみようによつては感傷の押賣かの如くに聞えるかも知れない。吾々の作家としての生活は淺いそこに吾々の心持が句になる場合そんな風にみられるのだと思ふだがその貧しい一句の中から吾々の心持を汲んで戴ける人があるなれば此上もない喜びではある。

それにしても吾々は精神的にも物質的にも多大の便宜を圖つて戴いてゐる、本社關係並びに諸先生がたに深く感謝しなくてはならないと思ふ。特に例會毎に御出席御指導に與つてゐる、綠雨、雨町、かほる、鶴峯の諸氏其他新水、豆秋、素人氏夫妻の方々へ深く感謝の誠を捧げたいと思ふ。殊に雨町氏には例會以外にも度々御足勞を煩らはしてゐるので如何に御禮を申しあげていゝのかわからない。切角來て戴いても茶一つ差上げることの出來ない病院の世界。吾々はこれに報ひるそれはたゞよき川柳への努力、あるのみだと信じこゝに深く御禮を申し上げると共に將來の川柳への努力を誓ひたいと思ふ。かくすることに依つてまた 先輩への靈を慰さむる所以だと信ずる。

幸ひ支部復活以來 湖舟氏を失つたことは淋しい現實の一つではあつたが、他に變りはない。どうでこのまゝ吾々の周圍よ、健在でゐてくれ！三年五年十年、あゝ吾々にこの日月と生命を與へよ 然る時吾々の中から、たれかはこれが私達の句です と示し得るときが來るであらう。

さはれ、よき明日の爲めには今日一日をも亦よりよく 生かす者でなくてはならないことを吾々は忘れてはならない。（六、六、七）

川柳修業記（二）

句箋　子

課題の事

座題兼題にかゝはらず、全然知らぬものや、かた過ぎるのや突飛な奴に出會ふと初心の内は隨分閉口する。其中でも俳句の題を出されると俳想が浮んで困るもんだ。川柳の修業が積んだ人は平氣で作句が出來るが、僕等の樣な者はなまじ俳句を嚙つた經驗が邪魔になつて、作句しても俳臭味があつてどうにも困る柳壇にも俳句と川柳と混合した樣な一派かある、俳柳の分岐點が分らぬ所謂ぬえ的趣味のもの斯ふ云ふ柳壇の句會へ行くと、俳句屋に商賣替へした氣にならぬ句が少しも抜けない。或時『鳴子』といふ席題が出た。これは俳句の季題として隨分云ひ古されたものだ同じ秋の題でも案山子などは川柳化すに面白味もあるが、鳴子では大したよい收穫もなからふと思つたが、果たせる哉句には「稻雀鳴子にたちし羽音かな」『黃金の波に鳴子なりやまず』等々拙い俳句樣のものが披講された。併し左うした俳題樣のものが出題されても、其處をうまく轉輪機を左右に働かして、軌道を川柳のレールの方へ切替へるといふ仕事が、作句者の手腕なのであらふが、それは下らぬ努力ではあるまいかと思ふ。何故なら、まだ川柳へ全く抜け切つてゐない一派であらふから、そんなものを輕々しく信じたり敎へられたりしてゐると、自分は眞の川柳から遠ざかるのみで、遂には既成宗敎の金ピカ殿堂に迷ふ偶像禮拜者となり終る惧れがありはせかぬと考へた。序だから今一ッ僕の不審に思つたのは、奇妙な題だの突飛な題を課される事だ。或時席題に『狼』といふのが出た。無論僕には出來なかつたが。流石に先輩は先輩だけにとても素晴らしい句を其時見せられて思はず欵聲を漏らした。『狼を眞二ッにする一刀流』『狼の聲が聞こゆる峰の月』『狼の血のりの口が乾いて來』何と素晴らしい川柳ではなからふか。二の句は俳句の鹿と間違つた感じがする、三の句は實に

庚、絶なる光景ではないか、之は詩でない川柳でないこは決して云はれまいが、良い川柳でも詩でもない事は、初心の僕にも分る、こんな見せ物小屋の繪看板然たる句や俳句の出來損じのやうなものや、皿の缺けた樣な川柳が川柳なら甚だ心細いこ思つた。併し之は作句者が惡いのではなく出顯者が惡趣味から斯ふした結果を招いた事こ思ふ。作句者 こしては題が惡くても又狼でも狸狐でも川柳は作れる。併し今時狼なんぞ動物園で見る外にはそこらには居ない。寧ろ普通の犬であれば吾々には實感が伴ふが狼では空想で無理に詩はねば出來ない。そして良い句や眞實味のあるものは出來ない事は以上の句が示す如くだ、こ思はず出題の小言になつたが、實に初心者の僕はさう思ふのであつた。

師の言葉は味ふて聞く事

前說のやうな奇妙な一派でも其主幹こもなる人物は、相當の理論に立脚して、主張する處が有るのであらうが、其言をグループの人達が、深く味はぬこ統一が缺けて來る、だがこれは同人許りの罪でもない、主幹こなつた人の力量が不足する處からも生じる缺點でもあらふ、するこ馬鹿を見るのはそれ等を取まいてゐる僕等同樣の初心者だ。それは單なる俳句境に若しくは文字の遊戲を川柳詩こ戸迷ひさせられるからだ。それ等の點をよく知つてゐる路郎先生は嘗て僕等を誡めていふには、作句勞働者になるな。一生に一句でもよい、名句を遺す眞劍さで川柳を作れ句が活字になることばかりを喜ぶな。自己を眞實に育てろ、疑問があればドシ〳〵問へ。古句も味へ一少些事も見逃すな。等々々書けば限りがない。僕はそれ等の言を深く味ふて僕の川柳道を歩んだ。お陰で僕の足許も大分明るくなつた。併し之を旨信はしない、今でも絶へず其言葉は味ひ且つ翫味してゐる。するこ僕は未だ々々こ自重反省する氣が起きて、絶へず自分を鞭韃する結果こなる。それが正しい川柳に向上して行くよい教訓でもある。若しそれが師の言でも神樣でない限り間違はぬこも限らぬ。ゆへに味ふて聞くこいふ事は大切で、鵜呑みにするこいふ事は危險だこ云へる。でないこ變な川柳家に自分は育つて終ふこ考へた。

迎合句を作る可否

勿論迎合句なぞ作つてはいけないこは皆もいふ。自分もさう信じてゐるが、果たして云ふ如く實行してゐるか否か？僕は非常に疑はしく思つた事がある。其處で自らを誡める意味でそれを解剖して見た。迎合句こは選者好みの句を作る事で、例へば選者の好嫌ひや癖を呑込んでつまり選者の好みに迎合して作句する事でさうすれば十中八九分迄は其選に入る可能性はある。これは自分の句の能率を高めやうこする手段で一句でも多く活字になる事に骨折る事で路郎師の誡めの一つでもある。何故之を

不可として誡めたかと云へば其句は決して眞實なものでないからだ。要するに自分の感激を中心として作られたものではなく他人の意志や好みを推察して纔てが作り上げられたものゆへ僞りの句でしかない。それには自然嚴密なる檢討を經る迄もなく眞實の迫力がない。內容は誠に空虛なもので作者の個性は影も認める事は出來ぬ。形體だけは成程選者好みを狙つて出來てはゐるが何處かに遊離性があるピタリと來ぬ點を發見する。それは例へば造花の如き句で、匂ひも潤ひも生命も無いものである結極遺らぬ句で無駄骨折でおしまいになる句と考へられた。其處で優れた句の權威といふものが考へられる、川柳を飽くまで自己の感激を失はずに生み出せば其句が少しの缺陷があつても何處にか眞實の迫力が含まれ個性が光る事になる。それは何人にも認められる詩魂とでもいふものなので、然も斯ふしたものが內容形體完全の域に達した時は佳句であるから選者が如何に持前の癖や好嫌ひがあらふ共、それによつて妨げられる氣づかいは無い。佳句は佳句として必ず其選に入る事は疑ふ餘地はない。それは優れた句の力であらふ。それならば敢て選者當て込みの迎合句を作る必要は毫も要らぬ事であると得心も行くし又そんな下らぬ事に腐心する事は遂に自己滅却の素因を作る仕事だといふ事を悟つた。

天狗慢心は失敗の基

少し川柳が出來ると直ぐ慢心したがる。僕なんざとても優越感に捉はれ易い男であつた。處がこんなフラ〳〵では駄目だと、幾度失敗したか知れない。自分の句が考へ過しや、修辭不足や、智識の欠乏や、修業の足らぬ事を悟らず、最早一かどの川柳家にでもなつた氣持で、安心しきつて、例の俺れがを發揮したもんだ。處がそれと反比例して、自分の句はドン〳〵落ちて來る。そんな自然退歩をお氣付きでなく、反て沒にした選者の力量を疑ひ、方面を變へて他の拔いてくれさうな處へ投じたもんだ。でも矢張り拙い句は何處でも成績はよくない。漸くそれと氣付いた時分には僕より後で始めた人の方が、非常に好成績をあげてゐた。實に怖ろしいもんだと思つた。又川柳論もよいが、餘り理屈ばかりに捉はれると、矢張り句作は下手になる。研究はよいが理屈家になる時は麗はしい詩心に益々遠ざかる樣になる樣だ。だから理屈家に佳句は少ないのが常だ。僕も理屈家らしいから未だに名句が一句もない。それで自から誡めてどうか良い作家になりたいと心がけてゐる。併し理論は批判であるから全く之を度外視する事は出來ない。故に此兩者が完全に併行線を保つて向上する樣に心掛けたいと……、天狗の鼻の先きを固い岩壁へ當てゝ自重してゐる。

作句態度を締める

其時々の會場の空氣或は課題によつて、情緒的密度の濃い川柳か多き場合と、滑稽皮肉味の勝つた句か多く作句される場合と新傾向の句の多き時とがある。いづれも一方へ偏する傾きのある事を時々見受ける。

情句の多き場合には母性愛とか親子の間柄とか夫婦兄妹友情戀愛等々人情方面の句が多數を占める滑稽に偏した時は穿ち皮肉洒落ユーモア等々のナンセンスものが多分に占める。新傾向句の場合は新興派めいた句や俳味がゝつた句或は十三字二十字

こいふ破調ものが多く現れる。此破軟こおぎけたのこの三種類は（其他細別すればあるが大體これで分けられるこ思ふ）何故さう一方へ偏するのであらふかそれは會場の空氣にも依るであらふが、席題の性質にもよるこ思ふ。川柳家は常に非常に感受性の鋭いものだから（僕は牛の樣に豚の如く遲鈍だが）選者の顏ぶれや會場の人々の有樣等で其雰圍氣こいふものが直ぐ影響するものらしい。それが題によつて益々強く現されるものこ思ふ。斯ふゆふ事は川柳を修業する上に何等差支無いであらう？こ考へるこ、ごうも之をハツキリさせぬこ害かある樣に思はれる。それは作者が何物にか捉はれる結果生じるのであるから、先づこれを鮮明にする必要がある。それには會場の雰圍氣に浸るこいふ事を明かにする事がよいこ考へた。此雰圍氣は善い意味では『自由に解放され、信じ合ひ、和樂し、親睦にして、誰れ彼れこ區別をたてぬグループの席だこいふ風に受取れたら自然くつろいだ氣持を以て作句する氣分を生じさせる―だが惡い意味に受入れるこ『不知不識他所の家に初めて行つた時の樣に、四角張つたり、寒暑の辭禮を述べたり遠慮したり、オドゞくしたり、誠に窮屈な思ひをする、』此惡い意味の結果か『捉はれるこいふ狀態を起させる原因で斯ふなるこ句想も滑らかには浮んで來ぬ、自然變化に乏しくなるから句も千遍一律的になる。『周圍に氣兼ねするのこ、』『自由にくつろいで居る』この相違は作句の上に非常に影響する樣だ。殊に課題によつては全然變化のない一方に

かほるさんにお逢ひして

明石　酒井　啞聲

かほる先生、かほる氏、かほる兄、かほるさん、かほる君……此等の言葉のうちからかほると云ふ方に最も應しい言葉を見出せと言はれたら、私は斷然かほるさんと云ふ言葉を摘出するに躊躇しません。私が何度もお逢ひして心安いからだと云はれる方もありませうが、全然未知のお方でもかほるさんと呼んで下さい。そう呼ばれる事によつてより親しみほるさんには大阪辯でゆつくりとお話をして欲しいのです。瞼をパチパチさせながらこう云ふ樣に坐つて膝の上に手をこう置きながら（寫眞は向つて右高橋かほるさん左は私、明石の人丸神社にて撮影）

思ひ切り甘えて見たい樣な叱られても見たい樣な氣のするかほるさん、「ごめんやす」とこう嬉しい事には大阪辯でかほるさんは云つて吳れやはります。かほるさんに應しい大阪辯です。何時迄もかほるさん

偏したものが出來上る。此句想の片寄るといふ事は、同想類句の多くなる事を豫想せられる。又其樣に周圍に氣をとられるといふ事は、自分がフラ〳〵になる事で、自己滅却と云ふ、川柳は自己の生活を失ふ事なく、自由に思想を川柳化する處に、新川柳としての使命を全ふする事が出來るのである。故に會場の空氣に捉はれ、題に囚はれて、作句する時は、到底眞劍な句を創作する事は不可能となる。先輩はいつも會場の空氣には捉はれない。然も超然と溶合してゐるから、同じ零圍氣でも善い意味の方で、なごやかに樂しく之に浸つて作句してゐる。斯ふした違ひが初心者と先輩との間にある。だから初心者も先輩の樣に寛いだ氣分にならぬと損であると思つた。古來から川柳の墮落は作者が眞實の自己を失つた處から生じたらしい。それは一方へ偏するといふ事が原因し、自己が何物にか捉はれ果てるからだ假へばユーモラスを通り越した洒落滑稽が狂句を生んだり、皮肉穿ちの過度が、人を顰蹙せしめる卜卑た非詩的川柳の產物となる。すると一方に偏し過ぎる事は及ばざるにも勝つた、醜狀曝露で其根本は、自己か何物にか捉はれるといふ處から、生じたのだ、故にさうしたものに捉はれず、川柳の內容を、穿ちは輕く、滑稽はユーモラスの程度で、情味豐かに、表現法も完全に創作したなら申分のない川柳であらふ、其意味で會場の空氣を吸ひ、題に捉はれぬやう心掛けるのがかんじんだと、貧弱な智慧袋を探つて、漸く銀貨位の價を握つた譯だ。

現代を背景に

川柳は市に人事詩である關係上情味を取扱つたものが、殆んど全部と云つてもよい位ひで、それだけ云ひ古され、探り盡されてゐる、柳樽を繙けば、最早人間の情緒は、殘る隈なく、古川柳に引浚はれたかの感じがするそれほど情味が咏ひ盡されてゐるから、世間並な情緒を咏つてゐては古川柳から平凡視されるそこで古句の手の屆かぬ點を、發見するに限ると、それは現代的生活要素から生れる、新鮮なる情味が、非常に効果がある、またそれでなければならぬと思つた。

暑中御見舞の廣告を募る

▽奮つて申込まれたし△

柳友交誼のため左の便法を設く

▼一口五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分原稿はなるべく簡單に願ひます。

▽申込期限　七月十日迄（八月號掲載）

事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三　川柳雜誌社

電話天王寺一一六七番
振替口座大阪七五〇五〇番

廣告申込は成るべく振替を御利用の上前金に願ひます（三錢以下の切手代用でも差支ありません。

北日本川柳大會

（五月十四日金澤市三越支店屋上撮影）

前列右から柳村、松水、めかく子、不明、金吾、（二列右から）好次、兎月、柳鳴、銀砂子、柳二郎、松瑞畵伯、漁村、砂上畵伯、錦堂畵伯、うたの頭、大雅堂、鈴の家、旭花、富思雄、素水、（三列）富久雄、不明、不明、不明、茶撫郎、不明、雪路、租影、紅の花、久男、夜左久、伊吉、旭洋、花聲、今雨、殘月、（四列）國山坊、冬青、好吟坊、たしろ、亂聖人、とし夫、花の家、秀江、諧月、柳月坊、靜樹、不明、松月坊、思介郎、白雨、木偶人、喜花、最後列三人不明

各地柳壇

—いのちある句を創れ—

本社六月例會

六月七日夜　於端の坊

折惡しく夕方より雨となり、雷鳴を聞き出足のにぶるにも來會者多く、會場の狹隘を感じたことは川柳隆盛の一現象で、欣快に堪えない。各區とも佳句多く路郎主幹も滿悅、次いで萬よし氏起つて最近の出來事を面白く話されました。初夏の夕を飾るに朗かな句會の幕は閉ぢました。（新本記）

（出席者）路郎先生、綠雨、かほる、鶴峰、夕鐘、おさむ、新水、變人、秋月、麥魚、世紀、愛緒いわを、三碧、みつる、柳甫、山雨樓、艸樂、山茶花、素月、一久、雞牛子、明暗子、鮎美、觀月英郎、葉平、柳骨、水車、虹一、あや美、春齋、哲郎、柳影、白柳子、八念、白雨、泉流、竹水、愚陀大呼、青踏、毒仙、久郎、悟郎、圓角、北人、萬よし、琴人、夢裡

兼題　減俸　　路郎選

減俸の烽火に覺悟させられる　夢裡
減俸で三年嫁を伸す也　虹一
子供まで俺の減俸知つてゐる　みつる
減俸を他所事に聞く暮し向き　夕鐘
減俸へなんのかんのと喰べられる　てるを
減俸の所詮は弱きインテリよ　山茶花
減俸に切捨てられたコンマ以下　世紀
減俸へ初號活字がつゞく朝　北人
減俸のきわどいとこに主任なり　水車
減俸に腹の子供へ又惱み　竹水
減俸を嗤ふ金庫のありはあり　鮎美
減俸を口實にして三等車　久郎
減俸にかゝはりのない化粧代　ともゑ坊
減俸に異見もなくて子澤山　明暗子
減俸へ去年のまゝのアッパッパ　泉流
減俸の今朝驛長は取りまかれ　八念
減俸の上に緣談斷はられ　圓角
減俸ですんでゆつくり眠られる　變人
減俸にふいと出て來た戎橋　あや美
減俸を言ひ渡されて雨の道　琴人
減俸へ片手を上げて應じたり　觀月
減俸は減俸麥が色づくよ　同

減俸へ今年の暮が氣づかはれ　新水
減俸のまつすぐ歸る樣になり　同
(佳)減俸に妻は轉宅すると云ふ　幾江
(佳)減俸の騷ぎ箱根のお湯の中　柳骨
(佳)減俸で此首いまだ差なし　三才
(佳)減俸で襁姿の妻となり　世紀
(佳)減俸のその日の門を低う入り　山雨樓
(佳)減俸と減俸カンカン帽で會ひ　靈壺
(佳)減俸と決まり欠伸が續くなり　同
(佳)減俸に口尖らした甲乙丙　奇可愛
(佳)減俸に細胞組織異狀あり　同
(佳)減俸に豫約段々取り消され　水車
(佳)減棒のそれから父は謠はない　同
(佳)遺瀨ない諦減俸級であり　毒仙
(佳)他人ごとに聞く減俸の無理ぢら　同
(人)減俸の騷ぎの中へ吳春買ひ　春齋
(佳)減俸へ東京からの無心狀　青路
(人)減俸に思案の首の細いこと　山雨樓
(地)減俸にいぢけきつてる笑ひなり　青路
(地)月給袋輕き思ひは妻もする　山雨樓
(天)減俸はされたが送金減らすまじ　夕鐘
(軸)減俸のはらいせ女房なぐられる　路郎

席題　物尺　綠雨選

念を押すその物尺が違つてゐ　新水
物尺へ親しむ娘に緣遠く　艸樂
座布團の下を物尺敎へられ　白柳子
物尺の裏を夫が踏んで行き　柳甫
メートルを子に敎はつてふがいなし　秋月
奧樣も女中も同じ尺で縫ひ　泉流
物尺へ惜しい端切れになつてゐる　觀月
物尺を渡せ渡せと泣きじやくり　世紀

(七き妻に)

兒は二尺にのびて來し妻よ　葉平
出來てきた寫眞に尺をほつて立ち　かほる
物尺を膝に三面記事を讀み　いわを
物尺の目盛で嫁ぐ日を數え　三碧
戀知らぬ娘物尺つゝがなし　變人
物尺をやれば阪妻うまくやり　水車
メートルで買ふに娘を連れて來る　同
尺立てゝヒステリツクな聲になり　夕鐘
物尺へ眼鏡のゐる母となり　同
物尺で今更猫背の氣にかゝり　愛緒
物尺を立てゝ姉何か獨りごと　同
共稼ぎ物尺にもう用もなく　萬よし
物尺のゴルフの眞似へ母の聲　同
(佳)物尺のとゞかぬとこへ逃ひた虫　八念
(佳)物尺で打つ眞似をして睨まれる　一久
(佳)物尺を前に母娘談し込み　悟郎
(佳)二尺ざしで兒に計つて見る　葉平
(佳)物尺へたるみを見せて並辭がよし　柳甫

席題　急病　山雨樓選

お隣りが醫者でよかつた胃ケイレン　明暗子
急病の店にお客の聲がする　山茶花
よい時に來たと手拭絞らされ　毒仙
決勝の明日を控へて風邪をひき　世紀
急病へ大和の藥見當らず　泉流
急病に馴れて賣藥買ひにやり　久郎
急病を使ひ家出へ二行欄　北人
急病の疊に砂が落ちてゐる　觀月
寢苦しき宵母病むの知らせが來　三碧
急病を知らせたあとの落椿　鮎美
急病へ値切つた魚氣にさせる　麥魚
兎に角に浣腸したを褒められる　圓角
急病へ歸れば近所寄つてゐる　艸樂
山小屋のランプに脈が細くなり　青路
急病の知らせ大阪廣すぎる　柳甫
急病人モルヒネ注射を戀しがり　素月
富山の藥袋をさがす夜　葉平
急病へ泣いてかゝるも女氣の　夕鐘
急病に母親はもう泣いてゐる　みつる
急病といふ智慧のある愛人だ　變人
急病知らせに行けば小火があり　新水
急病のあとを給仕に賴んで出　おさむ
急病の子へ落ちついた聽診器　同
急病へ飯のこげつくにほひする　いわを
急病へ仰山さうな見舞客　同
急病へ電話のベルが放つとかれ　柳甫
急病へ子が尤ともな事を云ひ　同
急病は今日の天氣ん惜しがりぬ　白柳子
かけつけて見れば急病飯を喰ひ　同
急病へコップを割つた臺所　同
(客)急病が歸つて見れば笑つてゐ　水車
(客)まんまるい死骸脣紅熱でした　萬よし
(客)急病へつゝ立つた時を聞き　新水
(客)急病といふにかまどはけむた　竹水
(客)急病にほかの子供が邪魔になり　同
(人)急病へ嫁の氣轉を風呂で聞き　新水
(地)急病の靜かになつた下駄の數　雞牛子
(天)急病の時など困るよい景色　毒仙
(軸)急病へ母の額の鍬の汗　山雨樓

席題　空　雞牛子選

將來は先づ空を飛び攻めて來ん　鶴峯
ぼんやりと空を見つめた待ちぼうけ　おさむ
惡夢から覺めれば空は明るうて　竹水

大空を目指して草は伸びて行く　八念
理屈をやめて空を見ろ友　青路
階級戰を餘所にプロペラ　萬よし
生きている此の歡びに空を見る　葉平
ルンペンの空へ拳を握るのみ　琴人
大空へ煙草ポカ〳〵吹かすなり　いわを
俱に天をいたゞかぬ空暮れにけり　路郎
青空の下を小さき君と行く　山茶花
大空へ海水浴はへそを見せ　同
空でみる街陽炎にゆれてゐる　白柳子
空で撒くビラへ走れば川があり　同
(客)空模樣わるく病人首をあげ　山雨樓
(客)大空に戀する鳥の氣樂さよ　一久
(客)哲學をやつて大空なつかしゝ　白雨
(客)空模樣見て圓タクは負けぬなり　久郎
(客)大阪の空で雀のよごれて來　麥魚
(人)青空のいよ〳〵青し片思ひ　路郎
(地)夢を見ぬ男となつて空も見ず　葉平
(天)空は青し工場は閉鎖也　路郎

席題　占ひ　鮎美選(共選)

白足袋の續く日もあり易斷所　久郎
トランプで戀を占ふ一人者　虹一
占ひを信じて女氣が變り　艸樂
占ひに云ひ當てられて滿足し　水車
占ひに淋しい心取戻し　雞牛子
占ひでもして見たらと母らしく　變人
占ひが不安になつた闇の夜　失名
入學の獨り占ひ繰り返へし　世紀
占ひへ瞳を伏せて居る弱さ　白柳子
死ぬ爲めの占ひだつたと誰が知る　あや美
待人の來る占ひが信じたし　麥魚
占ひをしてひつそりと隅にゐる　白雨
ベランダの占ひ憂鬱そうな顏　同
(佳)占ひのあふと信じて目をふさぎ　かほる
(佳)占ひへ入口のベルひゞくなり　同
(佳)占うて貰ふ自分がふと淋し　柳甫
(佳)黑髮が一とすじ占ふ掌に　愚陀
(佳)占ひは父の知らないまゝになり　雞牛子
(軸)占ひがあたつてそうな青疊　鮎美

席題　占ひ　新水選(共選)

占ひを古い頭で聞いてゐる　觀月
占ひの合ふと信じて目をふぎさ　かほる
何をするのか舞妓に辻占買はれ　虹一
占ひの鹿爪らしく手を出させ　夢裡
死ぬ爲めの占ひだつたと誰が知る　あや美
割箸のみくじよいことばかり書き　水車
占ひはどこかできつと心中沙汰　柳骨
緣日の手相へ大勢たかるなり　艸樂
占ひがきつちり合ふて雨に遭ひ　明暗子
占ひを信じて斯くもルンペンだ　圓角
占ひへ瞳を伏せて居る弱さ　白柳子
(人)宵に出たハートの一が氣にかゝ　八念
(埠)占ふて見る元氣なく不眠症　萬よし
(天)占ひに淋しい心とり戻し　雞牛子
(軸)三十にして占ひの的はづれ　新水

席題　怪談　互選

怪談もいれて場末の寄席の夏　毒仙
怪談に法善寺が夏になり　葉平
首つりがあつた話にまわり道　鶴峯
うらみをば云へば幽靈役がすみ　英郎
細帶の首へ卷きつきそうな晩　素月
怪談の膝へのそりと猫が來る　柳影
怪談へ坐り直して寒うなり　おさむ
怪談がすむと我が家の庭に見え　變人
怪談へ次の間のいびき氣にかゝり　愛緒
怪談に植木がさ〳〵動くなり　綠雨
怪談の井戸へ名月照つて居る　虹一
怪談は鼠の音に吃驚し　明暗子
怪談の歸りお寺の塀つゞき　麥魚
怪談を一人笑つて叱られる　三碧
怪談へ女は暗い影を持ち　柳甫
怪談の蚊とり線香に蚊が落ちる　鮎美
怪談の話電氣を消したがり　みつる
怪談にしきりに扇子動くなり　雞牛子
線香の匂ひに怪談めいて來る　世紀
怪談へ障子の穴に風があり　觀月
怪談に聲を落すと火がゆらぎ　路郎
怪談に泊つて欲しい人が出來　同
怪談に破れ障子を忘れてゐ　いわを
老船長怪談特に巧みなり　同
怪談へ糊がきいてるひとへもの　かほる
怪談のあとで芝居がしたくなり　同
怪談の上手な按摩よくはやり　一久
怪談の不意の停電聲をあげ　同
怪談へ息子は科學的になり　山茶花
怪談のいつち仕舞ひの下足札　同
怪談のこわさに顏をおさえてゐ　新水
風邪聲でする怪談の凄くなり　同

川柳雜誌社御旅支部例會(大阪)

六月七日　於玉手山コロニーハウス　櫻井圓角報

兼題　夏めく　路郎選

日差しもう夏となつたる強さなり　翠夢
薄物へその曲線に惱まされ　みつる
サナトリユムへ日ざし夏めく　多耶
張り切つた肉のリズムの夏めく日　同
としごろの夏にも捨てぬ赤しごき　圓角
子が泣くのさへ夏らしい甲高さ　同
(人)ひまなのだん〳〵空ビール　同
(地)四ツ角に去年と同じ氷店　みつる
(天)薄物の女給の肩へ手が滑り　あや美

兼題　背景　路耶　選

踊がいゝのバツクがいゝの批評され　翠夢
重役を背景にした腕の冴え　圓角
東西も知らずバツクも持たない身　多耶
黒幕のバツクもありてその凄さ　あや美
旅行記念俺より堂がよく映り　同
ウホンドに立てばバツクが目をつぶ　多耶
(佳)背景で生きる子に死んでる子　圓角
(佳)母親をバツクに娘〳〵する

席題　人前　路耶　選

持参金持たせて遣つたとはいはず　圓角
(人)客の前もあるフルーツ値ぶみして　あや美
(地)人前を云もて居れぬ一ト問きり　圓角
(天)戀は強し人前なんか考えず　翠夢
(軸)人前があつて米屋の拂ひする　路耶
(同)人前はなんでも買つてくれたり　同

席題　近眼　路耶　選

近視眼風呂でなじみも無くつかり　あや美
近眼のキリスト教を信じてゐ　圓角
(佳)近眼の人生深く掘り下げる　同
(軸)近眼が何がなかしい娘の子　路耶

川柳雜誌社　神戸支部

六月例會（神戸）

六月三日　於八宮神社　西村明珠報

この日山雨樓氏の御來駕を得て「川柳の藝術性」と題し有益なる講演があつた。

兼題　混雜　山雨樓　選

まだ賣らぬ切符賣場へ押されてゐ　春秋
混雜へ呆氣なく出る靈柩車　不然
混雜を風船じやれる樣にぬけ　華水
混雜のうちをすなほな香の煙　卯生
混雜を遠くベツトに白う居る　竹風
混雜を豫期して水を打ち終り　桃水
外交員混雜の日を斷はられ　耕甫
混雜に緋鯉の數がおもしろし　睡花
混雜をよい事にして常の帶　明珠
混雜をうつろな心になつてぬけ　同
(秀)取込みの中の他人に好い月夜　東洋鬼
(軸)母が死んで知らぬ親類ざわつく　山雨樓

席題　天井　東洋鬼　選

天井のシミへ家賃が滯り　竹風
天井が古くて風呂屋普請する　耕甫
繁榮に天井の低さ打忘すれ　繁堂
歸省子へ天井の低さ親しまれ　卯生
寢つかれぬ子へ天井の恐い音　明珠
天井へこの嬉びの響く事　同
惚られた眼が天井をはなれない　睡花
天井は低く爭議はまだつゞき　同
(人)天井は高く腕白盛りなり　華水
(地)行末を思ふ天井落ちかかり　山雨樓
(天)雨漏りの跡へ病んでる父の顏　竹風

席題　棚　華水　選

おめかけの寢間からとどく棚がある　鬼笑太
今日からは二人の世界棚をつる　桃水
大掃除棚へ上げるに一人立ち　春秋
父親が來ると棚吊る場所があり　東洋鬼
棚がまだここにも欲しい葱の水　睡花
子がなくて棚へ神經質になり　同
首切りほなし棚板を買ひに寄る　明珠
棚一つ吊つて男の役がすみ　同
(人)抱上げた兒にフト棚のものが見る　桃水
(地)女房の手を屆かせて棚をつり　睡花
(天)本棚に並んだ過去をなつかしみ　東洋鬼
(軸)棚の奥古い玩具の無事に居る　華水

席題　廣告　睡花　選

終電車廣告欄も見られてる　華水
廣告をまるめて入いる小料理屋　鬼笑太
廣告の色もはつきり夏のもの　鬼石
若い氣でゐる廣告呼びかける　山雨樓
身に覺えあり廣告を讀み終り　東洋鬼
思案する橋へ廣告燈が見え　同
廣告の氣球博覽會の空　春秋
廣告のはさまつてゐる戸へ歸り　同
(秀)廣告へ子も用のある顏をよせ　桃水
(秀)僞善者の如く廣告色を替え　山雨樓
(秀)廣告へ心が動くちびた下駄　東洋鬼

席題　單衣　互　選

單衣着て宵をどうする當てもなし　東洋鬼
短氣者單衣の糊が氣に入らず　明珠
退職の父いかめしふ着る單衣　桃水
單衣きてライターはほつとかれ　卯生
宿帳の單衣になつて空を見る　華水
物言ふた娘が目立つ單衣にて　桃水

單衣もの蒔の味は同じこと　睡花
單衣着てぞざいな腮さすつてる　鬼笑太
幸福は單衣の子供肥つてゐ　華水
腹の子に單衣で寒い事を知る　柳骨

川柳雜誌社
御池橋支部　**五月例會**（大阪）　村松夢裡報

五月十九日

兼題　煩悶　靈壺　選

煩悶を拙ない筆で並べて來　夢裡
國の空の青さを煩悶ふと思ひ　三碧
（秀）煩悶を抱き窓際さけて居る　忠彌
（軸）煩悶のつまむ湯豆腐またくづれ　同

兼題　呪　靈壺　選

ルンペンの呪ふ力も無くて生き　青兒
メーデーの雨は呪ひの樣に降り　同
呪はれた村へ富山の藥賣り　三碧
呪はしく登る煤煙見つめたり　青兒

兼題　体　裁　靈壺　選

体裁をかまう士族の父を持ち　三碧
体裁もよいがこつてり塗つた顏　夢裡
ウインドは体裁なをす所にされ　忠彌
体裁のよい世辭云ふて貸さぬ金　青兒
体裁と云ふ言葉は暫く忘れてた　雅純
（軸）体裁のいゝナフタリンにさびる　同

兼題　宣　傳　かほる　選

野球場の空宣傳の輕氣球　三碧
宣傳を兼れて娘の夕涼み　白石
宣傳の大提燈が歩いてる　青兒
戎橋宣傳の灯が波に搖れ　忠彌
あみだ籤宣傳部から廻つてき　靈壺
前座ちと宣傳すぎたかと思ひ　同

兼題　風　船　かほる　選

斷念した目風船見つめてゐ　青兒
風船をつく裏町の狹くして　白石
目醒むれば風船は天井にくつづく居　雅純
風船をよろける足で追ふて行き　忠彌
風船を電車の中で持てあまし　靈壺
風呂歸りふと風船の氣にもなり　かほる

兼題　希　望　かほる　選

希望なぞ忘れた樣に細く生き　忠彌
寄附金へ希望をすれば横を向き　夢裡
目なざしは希望に燃くた飛行服　雅純
燃ゆる希望へ胸を患ふ　いわを
出る時の希望を捨てゝ住む塲末　青兒
纏つた通知希望の人となり　夢裡
（軸）その希望廻轉椅子がまわるなり　かほる

川柳雜誌社
鶴町支部　**鶴町行脚句會**（大阪）　關本雅幽報

五月十三日

兼題　希　望　雅幽　選

ちつぽけな猪口で希望の大きすぎ　木馬
子供等の希望もあつてまだかせぎ　主二
子の希望聞いて頭をなぜてやり　榮坊
ぬかづきの胸に希望のかず〳〵よ　變人
先生に希望聞はれてもじ〳〵し　一坊
裏切られ希望もなにもあるものか　正敏
新しき希望にもゆる金ぼたん　照屋
それ〴〵の希望を乘せて移民船　秋月
そんな希望かと笑ふ者もゐる　小柳子
卒業後希望すかつり裏切られ　孤山
（軸）印刷にして來年の希望なり　雅幽

兼題　乳　房　互　選

錢湯で乳房見られてなやむ事　千成
呑み足つて乳房へ寢息立てるなり　紅
白粉が乳房のあたりまで塗られ　小柳子
乳呑子の欲は乳房を押へて居　紅
張つて來た乳房へ女給歌ひ出し　木馬
母親の晝寢の乳房ちはすわず　章
關取りを育て上げたと言ふ乳房　雅幽
子守歌添乳の母もれたらしい　變人
しなびたる乳房に九人の子供あり　秋月
しなびてる祖母の乳房へ孫したい　紅
泣きじやくりながら乳房は心得る　木馬
不孝者同じこの乳のみながら　秋月

兼題　長　命　紅　選

長命長生きはしたし孫に嫁を取り　一坊
ありがたき長命寺の鐘をきき　竹葉
ほめられて祖父たくあんへ歯を見せ　千成
九十九も生きて噂の種となり　照屋
長命の話食物違ふなり　木馬
（佳）年きけばぢいさん笑ふばかりなり　木馬
（同）長命な相だと易者言ふてくれ　稔枝
（人）今時の若い者は〳〵と御長命　雅幽
（地）天盃を拜みに山をつゝえてゆき　秋月
（天）長命が殘る元氣の猪口をなめ　木馬
（輔）長命が並ぶ行幸の道すがら　紅

兼題　腹　木馬　選

夕餉すみ子供は腹を見せにくる　小柳子
腹ばかりふくれて意見まとまらず　雅幽
（五客）腹卷へ旅費しつかりと入れて旅　紅
（同）腹痛を眞似て甘へて見たい人　變人
（同）腹掛の中は小錢の音であり　紅
（同）腹這ひで書く達筆な無心狀　雅幽

（同）ふぐの味知らずに食つた腹ぐろ　碧郎
（人）太つ腹彌次馬連も道を あ・け　千成
（地）この腹がにえるようだと母は泣き　秋月
（天）その腹の中を讀むのに酔ふてる　變人
（軸）腹の立つドアーが入れた空氣なり　木馬

席題　嘘　互選

その嘘を手紙ならこそ書けたのだ　變人
嘘つきは眞面目な顔で話しかけ　照屋
そんな事嘘々々と娘言ひ　紅
長じゆばん明日の嘘を考える　紅
嘘付いて見た大阪のごまん中　碧郎
總選擧入れておいたと嘘を言ひ　榮坊
二度目から子供うそやと取り合ず　千成

川柳雜誌社　螢ケ池支部句會　大阪）

六月七日　茨木奈緒美報

氣溫七十餘度の午後の陽に少々弱らされながらも盛會に六月句會を開く。出席者二十餘名。この日、本社より綠雨、雨町、かほる鶴峰の諸氏の御出席を仰ぎ、熟心に作句にふける。

席上雨町氏より、有益なる御講話あり、一同學び得るところありて三時すぎ散會す。

兼題　秋　綠雨選

つり錢とキネマニュースのある秋　一流
秋ではいやだと妹すれて見せ　伊勢子
振袖を着れば看護婦見違はれ　可章
緣談へ秋大きく振つて逃げ　杜洋
麗人の秋重たき冬となり　康夫
犬の鼻匂ふ秋へついて來る　藏六
戀知つた舞妓、秋をよくいぢり　同
かくれんぼ秋が見えて見つけられ　石松子
（佳）うかつにも秋を燒いた獨り者　一流
（同）秋から出すのを見ればマスクなり　雨町
（同）振袖は窮屈らしく座つてゐ　伊勢子
（同）誘惑のからだに秋まとひつき　奈緒美
（同）秋ぶら〳〵手をつなぐお正月　沙門
（同）秋ちとふくらんでゐる風呂敷　同
（軸）三越の風に秋はひるがへる　綠雨

兼題　英語　雨町選

英語等習はず番頭酒をのみ　水馬
トーキーのイエスが聞けた中學生　杜洋
問はれてる方も解らぬ外來語　可章
此の年になつても英語おぼへる氣　伊勢子
英語劇わからぬながら手をたゝき　石松子
こりやあ獨乙語だらうと英語を知らぬ　思芳
看板が讀めて嬉しい初歩英語　沙門
近眼の强度英語をちよつと讀み　水畔
英語で書いた品が賣れます　愚寵
英語など讀めて親をうとんじる　一流
通じない英語は品を指してゐる　禮二
英語より手眞似の方がよくわかり　同
ラヂオ今英語講座でつまらなし　藏六
ルンペンの一人英語も知つて居り　同
すら〳〵と字幕が讀めて面白し　六華
馬鹿にして話す英語へ腹立なて　同
（佳）夏の朝英語で話す人が行く　康夫
（同）落書きの樣に英語のペン動き　伊勢子
（同）わからない英語胡麻化されてゐや　水馬
（同）僕も彼女も同じイニシヤル　晴夫
（同）灘波橋でゲットバイはどこへ行く　照夫

席題　選手　かほる選

必勝を明日に選手等碁を圍み　晴夫
ユニフォーム脱ぐや華族のポンチなり　子浪
女選手魅力の足をみせ　綠雨
寢ながらも選手の事が氣にかゝり　飛車
選手と云ふ肩書があり無事勤め　思芳
優勝の選手へサット暮の風　康夫
決勝點拍手の聲と共に入り　六華
決勝點選手ぼやけたまんま撮れ　逸朗
落第の選手やつぱし人氣者　狂兒
勝つたとも言はずに選手水を飲み　鬼子
招待席ちらりと選手眺めとき　妙哉
應援へ勝たねばならぬ義理が出來　鶴峰
美しい心で選手敵をほめ　水馬
名選手たゞ微笑んでゐるばかり　康夫
策戰がついて眠る氣の腕を解き　同
（人）選手今入場をする青い空　康夫
（地）麻雀も打てゝ選手のいゝ男　晴夫
（天）決勝の明日にぴたチョコレート　愚寵
（軸）瞬間の姿を選手給される　かほる

席言　言ひ譯け　鶴峰選

言ひ譯をすれば段々ばれて來る　鬼子
言ひ譯も聞いて貰へぬ茶をすゝり　雨町
言ひ譯はちと仰山な並べよう　沙門
言ひ譯をする部屋壁が前にあり　かほる
言ひ譯を主人は輕く取り合はず　康夫
言ひ譯もせずハンカチを食ひしば　水馬
言ひ譯もさせず刑事は引いてゆく　愚寵
堂々たる言譯に父ほんまにし　飛車
馬鹿々々しくなつて言譯け空を見る　一流

言ひ譯に仲居は輕う猪口を受け　晴夫
言ひ譯けへ姐御の聲のきついこと　奈緒美
言ひ譯がくすれるやうに泣いてゐる　妙哉
夜遊びの娘は隣からおくられる　照夫
會ふ間ぎわまで言ひ譯を考へる　子涙
言ひ譯の助太刀をしてくれる母　綠雨
（軸）聞く丈けは聞くようなづく胸の　鶴峰

席題　チップ　互選

チップなぞやらぬぞと醉ふてゐる　綠雨
稼ぎ高十二時の灯へかぞへてる　石松子
古參からチップの事をおしへられ　六華
チップさへ貰へば用事のない女給　一流
ウエトレス諧めながら送り出し　逸朗
朗らかな笑ひ今出たノーチップ　鬼子
三人が相談してノーチップ　水馬
ほんとうに呑む氣チップをやらぬなり　鶴峰
まあえゝやないかとチップ握らせ　同
すき燒きへチップの高を定められ　奈緒美
チップにはちと多うすぎるつり　かほる
この次も來る氣は派手なチップなり　雨町
　　同

加古川支部句報（兵庫）

五月五日　水田篤男報

席題　爪

何待つか猫は淋しく爪かくし　魚城
爪切つた事がくやしい松露とり　泰山
爪まで磨いてほれてみたいのか　美也光
爪磨く社長へ給仕お茶を入れ　篤男

席題　初夏

アイスクリーム早初夏を味はせ　魚城
合服の月賦がすまぬに夏になり　美也光
何はさて置蚊帳の入る新世帶　同
えんどうの花へれむたく畦に立ち　光穗
夏衣裝になつてうれしい肩になり　同
うどんやののれんが重い初夏の風　同
じつとりと汗ばんで來る潮干狩　泰山
裏長屋手つ取り早く夏衣裝　洛陽

席題　ビール

一本のビールを親子やつと空け　美也光
女給もう笑はずビール五本目だ　同
おさかなが手輕だからとビールにし　泰山
空瓶の數に思ひかへしてみる　魚城
ビールの泡にひげをぬらしてよい親父　光穗
カフエーのビールの泡に夏をかぐ　篤男

川柳雜誌社 鶴町支部 鶴町川柳行脚（大阪）

關本雅山報

留守

輕まれた留守鼻唄になる居候　光路
留守居番れずみのわなをかけて居る　選
妻の留守ライスカレーに似た出來　一龍
新世帶留守居の妻に日ながし　變人
働きの留守に女房の晝寢かな　松枝
留守番の腹に一物あつてなり　狐山
留守番に買物の値を當てさせる　寛柳
留守ですといはれ成程錠があり　突破坊
留守ですそりな箸老夫婦だけの留守　木馬
集金へ其場のがらの留守を言ひ　元山
（佳）留守番へ彼はすつ巻れ込み　天柳
（同）親の留守子は何かしら遊んで居　岩石
（同）干物を雨に打たせたまゝの留守　白峯
（同）内らから掛けて留守居の女の子　茂草
（同）お隣りへ子供預けて一寸留守　稔枝
（同）どうもよう出やはりますと兩隣　雅幽
（同）妻の留守それからそれへ用があり　同
（人）掃除して見ても留守番つまらな　木馬
（地）預かつた包氣になる留守居する　紅
（天）若夫婦國旗を出して留守にする　雅幽
（軸）留守へ來て伜の意見たのまれる　光路

銀行　山

銀行の前に自轉車こざ〳〵し　月選
銀行のいすに兎に角太くかけ　茂草
銀行のサービス麥茶すみにあり　變人
身なりなどかまわず預金してるなり　松枝
月末に銀行にゆく樂しさよ　小柳子
通帳を開けてホゝ笑む若夫婦　正路
考えが附いて銀行へ持つてゆき　榮坊
銀行の天井高く〳〵見る　元山
銀行の窓兩替へは後にされ　木馬
一と昔前は銀行で上得意　紅
銀行の裏の長屋に住みなれて　章
札束へうつとりすれば名を呼ばれ　突破坊
（佳）銀行のかごに師走の風の吹く　同
（同）たまさかの便り銀行に出來　變人
（同）行員は稼いだ金を輕くよみ　同
（同）銀行の利子つゝましく母子食み　雅幽
（同）珍客が來て銀行へそつとゆき　松枝
（人）銀行の通帳に親の汗を見る　秋月
（地）銀行の窓にポプラの風があり　同
（天）月掛けの滿期一家を春にする　雅幽
（軸）銀行へゆく儉約な働き振り　秋月

川柳雜誌社 神戸支部 友例會（神戸）

山月

五月廿八日　於華水居　西村明珠報

兼題　思ひ出　明珠選

道巾もいま思ひ出になつてくる　華水
思ひ出の寫眞を中に茶は香り　竹風
思ひ出の眼に今晩のまるい月　春秋
思ひ出に撮つた寫眞へ生き殘り　同
(人)星消えて思ひ出のあるバルコニー　靖弘
(地)病床記啄木論に生きし頃　鬼笑太
(天)思ひ出のテニスコートに影かな　靖弘
(軸)悲しさの思ひ出にある寫眞帳　明珠

席題　袋　春秋選

狀袋はつて孫を遊ばせる　靖弘
うつかりと袋を持てば重いなり　明珠
(佳)はな紙へ母は袋の鍬をのし　鬼笑太
(佳)本願寺の廊下へ信玄袋を置く　明珠

席題　硝子　靖弘選

新調の夏服で待つ窓硝子　明珠
ウインドの硝子へ蠅は腹を見せ　華水
海岸へ硝子のかけが光つて居　同
美太夫も出て來る晴れた硝子拭き　竹鳳
陳列の硝子拭く目に美人あり　同
(佳)かみなりに硝子しびれるやうな音　鬼笑太
(軸)稻妻に二人立つてる窓硝子　靖弘

席題　夏帽　華水選

夏帽を子供うれしく取つてくれ　靖弘
夏帽へ去年の切符無事にゐる　竹風
ひざ輕くたゝいて夏帽樹影に來　鬼笑太
(佳)夏帽へ扇子をつけて渡される　明珠
(佳)夏帽子一對一の外野にゐ　春秋

席題　泣き聲　互選

泣き聲にお乳も張つた手もすいた　竹風
きゝ譯のない泣き聲に父が立ち　鬼笑太
泣き聲をしのべば續くセコンドが　明珠
泣き聲に雜誌を伏せる若い母　靖弘
泣き聲をかくして娘肩がゆれ　華水

兼題　我儘　互選

金がありこの我儘がまだつゞく　明珠
我儘だ辛棒しろといふ心　春秋
我儘は頭が痛い等といひ　同
我儘のまゝで出戻り年をとり　華水
我儘を通した頃の紺絣　靖弘
我儘は鼻聲になつてからのこと　鬼笑太
我儘も言ひ盡くしてる床に病み　竹風

川柳草々會發會（大阪）

西田艸樂報

川柳は德川時代の狂句だと世人が想つてゐる間に、ドン〳〵新らしく力强くなつた。藝術的價値が愈々高くなつて來た。

現今の川柳を見る者、俗人は知らず、少しでも俳句に指を染めた位な者なら、慥かに驚異する、社會の各方面に川柳に惹きつけられる者が加速度で殖えて來るのは悅ばしい。我が大阪の藥劑師團にも川柳道に志望する者がかなり現はれ、何か指導機關を要求してゐた。その機會を捕えて、五月二十日南區高津北之町大阪藥業倶樂部樓上で式を擧げた。本社より路郎師始め綠雨、琴人、鶴峰の諸氏の出席あり、茲に路郎師の命名にて川柳草々會なるものが生れた。

高津宮趾、洗心洞文庫と相隣せる倶樂部一森の新綠を渡つて初夏の薰風櫻に充ち、場所柄閑靜にして、作句にも語るにも眞に心地よきアーベンドであつた。

路郎師の初心者を誘導する有益なる講演あり、綠雨、琴人氏等の選句等此の會の前途を祝福するが如き、誠に有意義なる會合であつた。

兼題　スタート　路郎選

スタートへ馬首が並んだ息を呑み　琴人
スタートさ切つては見たがやめにした　源二
スタートに黃色い聲が雨と降り　同
スタートが大事だ人に運不運　奇可愛
スタートの足に酒精のまだ匂ひ　同
(人)スタートへ並んだ我子はらはら見え　一二三
(地)スタートへ戀人がゐる母がゐる　艸樂
(天)スタートへ言葉少く送られる　同
(軸)スタートを切るこゝ既に金持さ
(軸)後家の子でもスタート切らされる

席題　少女　綠雨選

お下げの紐が毎日替るやう　往來
母の留守ごうやら飯も煮へており　艸樂
仕込まれてからの少女へ別な親　鶴峰
華かさ少女が踊る寶塚　源二
唇の紅を少女の眼の淸さ　同
肩上げのあるも少女の魅力なり　奇可愛
惡戲の少女へ巡査笑ふ〳〵　同
世が世ならおんば日傘と云ふ少女　同
少女で通すちちははの前　路郎
人前は走るにきめた少女なり　同
淋しさに少女に好きな唄が出來　同
(軸)おてんばがはやされて母は病み

席題　蝙蝠　琴人選

小走に蝙蝠の出る道を行き　源二

思案の顔に映る蝙蝠　鶴峰
一匹の蝙蝠に村の子はたかり　緑雨
蝙蝠を追ふ子宿題など忘れ　艸樂
宵暗の二人を抜けて蝙幅飛ぶ　同
蝙蝠に顔覗かれる物思ひ　路郎
念佛をかすめ蝙蝠庫裡へ飛び　奈可愛
驚けるゑへ蝙蝠斜に飛び　同
蝙蝠にどこか淋しい衣食住　同
(佳)蝙蝠の出る家に住む養い顔　源二
(佳)蝙蝠の里に臨月せまるなり　緑雨
(佳)蝙蝠にふるさとばかり思はれ　路郎
(天)蝙蝠よ僕も裏切者にされ　同
(軸)蝙蝠がどこいしよ〳〵と飛び

川柳雑誌社
籔川支部

六月例會（出雲）

六月十三日夜　於緑之助居　伊藤緑之助報

兼題　力　緑之助　選

豆の芽の力大地を破つて出　鴉天
草角力見てゐる方が腕を出し　柳光子
闘節の太さに力を入れて見せ　華村
引く力餘りにいとし犬の子よ　紫光
産聲に父の感じたある力　二三麿
失業へ力にならぬ知己ばかり　幸永
逞しい腕に正義の血が燃えて　春歩
起重機の下に疲れた人がゐる　麗亟
百姓の力米價がからかふ　雷相
(人)此の馬の力五人食つてゐる　二三麿
(同)あなどれぬ蟻の力よ眞冬　雷相
(同)團結の力を説いて中止され　鴉天
(地)いといけな力死線へ突き當り　互苦路
(同)自省の力へ自殺を選ぶなり　幽明
(天)忍從の力を抜けておし　默り　互苦路

節句　雷　相選

菖蒲酒お宮參りも寢てしまひ　紫光
土を打ちつゝ節句を祝ふ農繁期　柳光子
菖蒲湯に祖母の昔の唄をきゝ　緑之助
男の子僕の節句と大威張り　華村
節句だとて休めぬ今日のよい天氣　鴉天
一日を家で遊んだ雛節句　二三麿
(人)鯉幟子の手も添えて吊り上り　幸永
(地)節句は淋し子の居らぬ家　鴉天
(天)節句が來るにこの子は病みがちな　緑之助

螢　二三麿　選

風鈴の下に螢が一、二、三　幸永
醉眼にうつる螢の太いなり　鴉天
田舍から姪の土産に螢が來　雷相
戀し合ふ二人の前を行く螢　紫光
荒つぽい子の行水に螢逃げ　春歩
螢狩り貴夫人としての身だしなみ　緑之助
(人)背の子へ螢は過ぎて行くばか　麗亟
(地)螢がよわし反抗に光るとも　緑之助
(天)鳴けぬ螢も戀する術を知り　幽明

三味線　紫光　選

三味線と戸毎に立つて涙枯れ　春歩
三味線の音もしめやかに初夏の宵　柳光子
三味線の音が空閨へひゞいて來　雷相
三味線も覺え悲しい日を送り　幸永
格子戸をもれる三味の音琴の音　麗亟
三味線を膝に戀には非ず呑み　緑之助
三味線を抱いてうつろな目を開き　鴉天
(人)爪彈きに晝の姿宅靜かすぎ　同
(地)流し三味、は塲末で一人呑み　緑之助
(天)膝抱いて遠い三味の音きいてる　鴉天

情熱　麗亟　選

情熱に男一匹殺されて　二三麿
熱情に處女の誇りのくれないよ　緑之助
情熱の父で唇ひからびて　雷相
情熱の果て鐵拳の雨となり　鴉天
情熱の酒よ俺を亂すな　紫光
(人)情熱に輝く頬よいとしの戀よ　緑之助
(地)情熱に燃えてすまない許嫁　春歩
(天)情熱が爆發しただけのことなるに　緑之助

緑雨居小集（大阪）

橋本緑雨報

六月五日夜

久振りで逢つた舊同人の柳骨君は神戸から來てくれたので創刊當時の思ひ出などを語り寛いだ小集でありました。これから毎月一回づゝ月の早々に他の川柳誌を見ながら偶會を催したいと思つてゐます。

田植　互選

植付けが濟むと村會始められ　柳骨
長靴で田植す農事試驗塲　奇可愛
賑やかな田植役塲も早引し　雅幽
田植する背へつばみおちる樣　緑雨
昨日から降つてる中を田植え唄　公二
腰さする田植へ雲が燒けてゐる　同

空想　互選

虫の這ふ壁へ空想目がとまり　公二
飯の匂ひに空想消えかゝり　雅幽
思ふたび金のことからふいになり　柳骨
空想に空はあまり高すぎる　緑雨

川柳雑誌社
神戸支部

友句會（神戸）

五月三十日　於華水居　西村明珠報

席題　別　室　二　南　選

別室に呼んだ課長の入間味　竹風
別室の聲が氣になる針仕事　明珠
別室へ通して仲をうたがわず　華水
別室は催促の聲ばかりする　明珠
別室の鍵もちがへる手に力　鬼笑太
（人）金借りに來て別室のにぎやか　明珠
（地）別室を急な用事があけて行き　華水
（天）別室を氣遣ひながら二人で居　同
（軸）別室を出る重役へ世辭がなし　二南

席題　公　平　華　水　選

公平な處置に一人淋し過ぎ　靖弘
公平を誓ふ書類がうづ高く　二南
公平をよろこぶ金のない男　明珠
公平な處置に爭議の旗を卷き　竹風
（人）公平を知らぬ綽名を淋しがり　二南
（地）長男も次男も共に叱つとき　明珠
（天）ものへやつとなりとくしてしまひ　鬼笑太

席題　宿　帳　明　珠　選

宿帳へ思ひがけない手のふるへ　鬼笑太
宿帳の世辭は景色を言ひ續け　二南
宿帳のどの字もみんなふざけてゐ　春秋
宿帳に馴れた二人へ金が盡き　二南
宿帳へ一と汽車おくれて女來る　靖弘

席題　遊　覽　靖　弘　選

遊覽へ女の足が不甲斐なし　二南
遊覽の明日もうれしい空の色　鬼笑太
新妻を連れて遊覽船に立ち　春秋
遊覽に伴の女は伏目勝ち　明珠
遊覽へ定期の客は立ちつゞけ　華水
（佳）遊覽に行くハンカチを入れくれ　明珠
（佳）遊覽の客へラムネの剩錢が濡れ　二南
（佳）平凡な土產遊覽船に搖れ　同
（軸）遊覽船あんまりゆるで横になる　靖弘

席題　接　吻　互　選

接吻を許してしもた靜かな夜　明珠
こはゞった顏へ二度目のキッスが來　二南
スクリーンのキッスへ娘ハットする　竹風
接吻を許した後の櫻んぼ　靖弘
接吻の後は無口のまゝでゐる　華水
運轉手接吻らしい音を聞き　鬼笑太
强ひられるキッスへ女給酒を注ぎ　竹風

琴平から屋島へ

六月二日　水谷鮎美報

絕景に瓦を投げて見たるなり　卜居
談　古嶺昔を偲ぶ海の色　同
團体へ賣娘ひらけた口をきゝ　觀月
石段で帽子をぬいで振りかへり　同
下向道偏路はまたも追こ越され　同
屋島から見れば帆船すべりゆく　同
デッキからあれが屋島よ壇の浦　同
三枚のお札に十圓紙幣を出し　まさる
土產もの買ふのに一寸からかつて　同
屋島から高松城を見つけ出し　同
平家蟹うらめしそうな顏に見へ　同
ケーブルで見る高松の夏の雲　鮎美
石段をのぼりつめるといゝ景色　同
團体の樹蔭〳〵に飯の味　同
公園の廣さに畫の砂埃り　同
朝霧のなかを多度津へ船は着き　方眠
四國路のこれが本當の遍路さん　同
善通寺大師はこゝにおはしまし　同
五劍山にぎりこぶしのような山　同

秋月居偶會（大阪）

妹尾變人報

席題　人　氣　秋　月　選

人氣ある馬券を破る口惜しさ　孤山
景品をつけて二人で手が足らず　變人
（軸）あんまりの人氣に候補者不安がる　秋月

席題　愚　痴　互　選

あきらめて居ると思はずぐちこぼし　榮坊
人の前ぐちも云はれず目でしかり　孤山
子の出來ぬ夫婦同志の笑ひぐち　變人
母の愚痴子供は飴をなめてゐる　同
夜更かしのだるま女房に不安なり　同
愚痴を言ふ筈の笑顏と知りながら　秋月

叡山吟行

水谷鮎美報

五月廿四日

竹馬の友花井彦三郎兄と五月晴れの一日の行樂は佳きものでありました。

友　達

友達の妻女のことを妻は聞き　錦士
友達のまごゝろ俺を泪させ　同
一升はちとむりだつた友と醉ひ　鮎美
友達と會ふ髭を剃る晝の風呂　同

春の雜觀

船頭へ花見歸りが猪口をさし　錦士
栗林公園

陽炎をじつと見つめて春ひかる　同
延暦寺しりめにかけて飲んでゐる　同
春の陽のなかに兄弟の鍬ひかる　鮎美
花嫁の来とぐ磯に春おぼろ　同
ケーブルに霞見へる京の街　同
こだまする道に鶯笛を賣り　同
逢ひ引きのこゝまできてるいゝ景色　同

塗青柳壇五月例會（大阪）

五月二十一日　熊谷紅選　報

席題　寄附　互

寄附事で古い昔の友が來る　金水
向ふから割り當てゝ來る寺の寄附　千成
下馬札の隣りへ寄附の札があり　紅
寄附金の事であちこち輪に成りて　雅幽
寄附の鉦たゝいて和尚經を讀み　變人
金高が落ちて寄附帳廻つて來　光路
永々と話して後は寄附の事　千成
寄附金は隣りと同じ樣にする　天柳
乞はるゝがまゝに寄附で御家の無事　雅幽
寄附帳へ氣前の好くて獨り者　木馬
寄進札見上げたゞけの懷手　光路
寄附帳へ家主が初筆たのまれる　紅
寄附帳へ女房の意見八分なり　雅幽

席題　眼鏡　清記互選

眼鏡屋のあるじ眼鏡を掛けて居り　とん坊
髮分けて眼鏡も掛けて居る若さ　元山
やつれ顏眼鏡でかくす夜の女　多計志
金ぶちの眼鏡が豫感持つて來る　千成
近視眼同じ度數が戀になり　孤山
言ひ負けた餘慣に眼鏡すり上げる　光路
ウエーブの眼鏡は理智に透き通り　同
金ぶちを掛けて意氣地のない男　紅
當選の數字に母が眼鏡出し　變人
その隣に黑い眼鏡が待つて居り　雅幽
丸髷の眼鏡は伊達でないのなり　紅
眼鏡越し眺めて娘の意見なし　多計志
感激の涙に眼鏡曇るなり　變人
戀を知る頃の眼鏡は僕を聞かれ　木馬
通信簿眼鏡を戴せて持つて來る　雅幽
老眼鏡すいも甘いも見えて居り　秋月

席題　雨傘　紅選

雨傘の名前氣にする女學生　滋芳
俄か雨安物の傘買ふて去に　多計志
雨傘は又貸にして消えて行き　ひかる
一本の雨傘驛へ待つ若さ　光路
（客）借りた傘大きな顏でさして居り　天柳
（同）もう雨は止んだが涙かくす傘　秋月
（同）返す時傘の破れへふと氣附き　廣崖
（同）雨傘の消えて柳の煙るなり　光路
（同）俄雨十七八のやぶれ傘　みつ夫
（軸）久し振相合傘のてれて居り　紅

兼題　心持　光路選

心持今日は晝寢を止めて居る　變人
電車からも待つて吳れる窓が見え　雅幽
心持ベンチに一人膝を組み　廣崖
（佳）心持二階の障子開けてあり　雅幽
（同）心持電車一臺やりすごし　廣崖
（同）今日も又ひやかされてる心持ち　木馬
（同）純眞な子供心の心持ち　天柳
（同）心持ちあきらめられぬ終電車　ひかる
（人）心持ちする人の來ず一人乘り　同
（地）心持りした甲斐もあり鍋をたき　變人
（天）待詫びてふと天井の面白ふ　子元
（軸）い話心待ちする湯が沸り　光路

兼題　澤山　雅幽選

澤山な小錢者屋ざらつかせ　木馬
澤山だ澤山だと醉ふて居ず　章
澤山に八百屋の鏡見せて居る　廣崖
澤山な人にプレーキ音もよし　木馬
澤山な釣り手に減らぬ池の鯉　廣崖
澤山に步を持たされて貧將槇　紅
（人）澤山に積んで書齋の見せたがり　ひかる
（地）澤山な德利淋しく醉ふてゐる　木馬
（天）澤山な賞品笑顏うずめてる　元山
（軸）澤山な蟻掃き寄せて病んで居る　雅幽

奉天川柳會月例會（滿洲）

岩崎柳路　報

場所　奉天公會堂前料亭更科於
五月二十五日午後七時
殖民地氣分大いに溢れる吉例の競馬があつた爲め出席者の意外に少なかつた事を惜しむ。
尙次回の六月例會は小生に幹事を仰せ附けられし故心よくお引請して零時半一同乾杯閉會す。

宿題　誘　ふ　溪水選

割引券あるお隣が誘ひ出し　登美坊
誘惑へもう遲かつた安奉線　連樂
花時を繪葉書で來る女文字　白洋
誘はれて行くカフニーに借があり　松代
麻雀に誘ふ電話の宵の口　柳路
（人）誘ひ手は客が來て居るなと思ひ　同

（地）誘惑に勝つて別れる終電車　新朗
（天）誘はれず誘惑もせずに家主の子　連樂
宿題　言ひ譯　柳選
泣いてる子附いて來た子が言ひ譯し　一平
言譯の出來ぬ女房へ土産物　保月
別れる氣言譯もせず腕枕　深太樓
言譯を聲明などと四角張り　同
からかへど言譯もせず女給ずれ　白洋
言け譯もせず先妻の子はこじれ　連樂
言ひ譯がときれ勝なる膝の指　登美坊
言ひ譯も上手になつた髮の艶　新朗
言ひ譯のヤヤコシクなる明るる朝　連樂
言ひ譯の電話にしてば高い聲　白洋
言ひ譯の重み六錢貼つて來る　新朗
言ひ譯へ惱む鼻先蠅が舞ひ　同
言ひ譯もせぬ新兵の額筋　連樂
言ひ譯を聞き流してる毛糸針　登美坊
言ひ譯の印に送り賠が來る　同
（軸）天晴な言譯してる課長室
席題　無理　互選
妾まだ無理萬能の若さにて　連樂
無理にとは云はぬと母の嫁が口　登美坊
神棚へ無理な願題の灯をともし　新朗
無理もなく屈托もなく共稼　柳路
無理解へ裏だん〜老けて行き　白洋

川柳雑誌社
天王寺支部句會（大阪）
須崎豆秋報

題　變人　雨町選
變人を夫に持つて齒痒ゆがり　敏坊
變人へ馬を合はせてゐる年増豆　鶴秋
御主人は變人でと女中が出　峰
話さへ分かり變人去ぬと云ふ　裸人
變人を藝者あつさり笑ふなり　三
變人のごこやら淋しさ三十五　同　汀

（軸）氣をわるくさせて變人歸つて來　雨町
（同）變人の話だん〜理屈めき　同
題　熟　雨町選
子の額があると思へば熟があり　三
死ぬなら一しよに死ぬも十八九　豆
赤ちやんの熟で二人がもめてゐる　秋
商賣をほつたらかして甲子園　裸
四十度の熟へ博士が靜かに來　人
（軸）一寸と熟へあわてる病み上り　同
先生にやつと熟だけ認められ　雨
題　乳、蛙　琴人選
乳捨てにゆく大河の月　豆
乳牛の乳の赤さへ春の草　秋
蚊は少し居れど蛙の鳴くはよし　鶴
氣まぐれの戀の逢瀬の河鹿なく　峰
汽車の窓から月夜の蛙　三
ステッキを逃げる蛙の面白し　豆
その頃唄を唱つて蛙の野　同
蛙鳴くあぜの近道見送られ　三
泥だらけな蛙へ苗を植え終り　汀
（地）鏡臺へ落ちた人氣を知つてゐる　春
（天）愚かさをなだめてくれ人に逢ひ　靖
（軸）責任を感じて人を笑はれず　明
（以下次號）　弘　珠

簸川支部だより
伊藤蓼之助報

六月十三日夜、小生の新居第一回の句座を開いたが、地理の關係もあつて久方の盛會であつた。

五ヶ年目の歴史を有つ川柳たかせ會を開散し、大簸川の發展を期す爲、すつかり改め「川柳大地吟社」となし、こゝに陣容新たなる組織を計畫し、革新第一回句會を七月上旬澄田麗亜居に開くことにした。

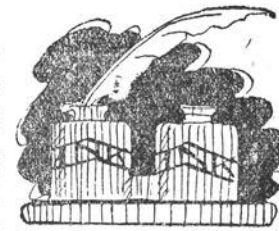
新同人の顔ぶれ次の如し

安部紫光、鹽野柳光子、澄田麗亜、板倉春歩、藤野華村、井原鴉夫、尾添雷相、飯島幽明、伊藤緣之助

新誌友
（六年六月廿日まで）

「川柳雑誌」一前金半年分金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には川柳雑誌の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（緣雨）

妹尾變人、永川秋月、三石孤山、青山一龍
松下小柳子、岩橋ひさを、林茂、角田信一
（關本雅幽）丸矢正一（福田山雨樓）古谷愚園
坊（四）村山月）手島福來（岩崎柳路）原田光男
竹内勝利、藤岡櫻果、幡八郎、中かずま、
荒田練屋丁、美甘芳太郎、井原通夫、大道
双車、酒井啞聲、關根五右衛門、阿部佐保
關野上蚊郎、横江義情、奥六造、勝山齋（本社事務所）括孤内は紹介者



編輯室から

▽薄暑の候となつた。セルから單衣へ。カンカン帽を傾けて引くビールの滿は大變結構だが、編輯局もこゝ暫く汗と戰はねばならない。

▽期待されてゐる山雨樓氏の「柳味を探る」は氏の御家庭に病人あり、今月も續稿が頂けなかつた。

▽閑生氏引續き今月は「名句觸感」を寄せられ「柳の絮」益々好評。句箋子亦眞實を語る。其他夫々好讀物揃です。御好評を賜りたい。

▽火華が消えて三ヶ月。次號あたりから更生してほんとの火華らしい火華を散らすかも知れない。投稿を歡迎します。

▽題詠は今まで個人選二題、共選一題計三題宛募集してゐたが二題に減じ共選は隔月募集となつた。これは先月號から實行されてゐます(町二)

▽本號も原稿が可成輻輳した。殊に地下鐵原稿の大部分は次號廻しとなつた。

▽近頃の柳界は疲勞の色が次第に濃くなつて來たやうに見うけられる。此の時に當つて我が社の「第一線」欄の設置はこの沈滯せる空氣を呼び覺ますのに充分であつた。各方面から非常な賞讃と激勵の言葉や手紙を澤山戴いて居る。殊に本誌寄員の内でも此れからは「第一線」に投句するからと云つて來られた方もある。私共はいざ闘はんの意氣にもえて居る。(杏三)

▽前號に「第一線」欄新設のため作家の多くが主幹の選をうけることが出來なくなつたので主幹を信頼される多くの讀者より絶對主幹の選を要望せられる向多く、依て協議の結果特に「春秋點」欄が新設される事になりました。斯くては主幹の疲勞が氣づかはれるのですが、師は愛讀者の熱誠に酬ゆる爲めには、死す共辭せずと、茲に一欄を加へた次第です。どうか投句規定を熟讀の上御投句を願ひます。(琴人)

▽京都の吉田六好君が亡くなつたそうだ。僕が萩の茶屋三日路にゐたころ、ちよい〳〵やつて來た。そのころ六好君は京染悉皆をしてゐたので僕の注文で愚妻の帶を染めてくれたことがある。その帶の柄は三角鱗で、色が褪せてしまつたが今でも殘つてゐると思ふ、明治四十四年頃だつたと思ふ東京の帝劇で坪内逍遙作の喜劇を觀たことがある。その時の舞臺裝置から俳優の扮裝がすつたり三角の應用だつたのを面白く思つたので人形のやうな三角鱗の注文をしたのであつた。それからずつと後にこの三角鱗が隨分流行したが、その魁をカンと古くにやり、それを六好君に染めて貰つたのも今更のやうに思はれる。尤も川柳も時々休んでは居たが相當の熟もあつたし、句としてもかなり筋のいゝところを見せてゐたのに惜しいことをした。聞けば柳友によつて葬られたさうであるが六好君も地下にあつて微笑禁じ得ないものがあらう。

▽三味線草が久良岐號を出した先輩の德をたたへる事は自分の估券の下がることのやうに思ふ現代にあつてこの擧はいゝことだと思ふ。僕は病中だつたので極く簡單にしか書けなかつたが柳界としてこの老先輩に對して相當酬ゆるところがあつてもよからうと思ふ、僕も立場の相違から禮を失してゐる場合が多いので鶴牛子君の斯うした仕事に對しては、頭が下がらざるを得ない。まず〳〵柳界のために奮闘を期待してゐる。

▽昨夕遲く戻つたら、愚妻が、花童子さんから又鈴蘭を送くつて頂きましたといふ。そして歸りまで待てゐないで、アートの先生や奈那の先生に少しお分けしたところ、どうして北海道から届いたのですと不思議がり大變よろこばれわざ〳〵花瓶を求められて教室の隅にかざり、皆にみせられたそうだ。私も清淨な鈴蘭によつて昨年の函館行を眼のあたりに彷彿させられた昨年も函館から歸阪後土つきのまゝの鈴蘭を送つて貰つたが、それもすつかり枯れたとばかり思つてゐたのに今年の春になると青々と葉が茂つたので大きな期待をもつて花の咲くのを待つてゐたが、とう〳〵花が咲かなつたので、やはり環境が違うと駄目だとあきらめてゐたところだつた。もう花童子君から鈴蘭を送つて頂くやうになつてから幾年になるか知れない。いつにかはらぬ厚情を花そのものよりも感謝してゐる。(路郎)

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に住所氏名を明記する事。

▼「第一線」への投稿は社友、同人及推薦作家に限る。

▼春秋點及近作柳樽は一般作家（第一線の推薦作家を除く）の欄とす。但し同一人にて兩欄への投句は遠慮されたし。

▼光耀抄は女性作家に限る。

▼春秋點、近作柳樽及光耀抄作家中より優秀作家を第一線欄へ推薦する。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事、

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第八卷第九號課題

七月五日締切（各題十句以内）

▼近作柳樽　安井ひろし選
▼迷信　長崎柳秀選
▼緊縮　關本雅幽　中島鐵洲　共選

第八卷第十號課題

八月五日締切（各題十句以内）

▼近作柳樽　松丘町二選
▼眞畫　岩本素人選
▼魅力　安西杏三選

毎號募集

▼第一線　麻生路郎選（十句以内）
▼春秋點　麻生路郎選（五句以内）
▼光耀抄　麻生葭乃選（無制限）
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼請代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和六年六月廿五日印刷
昭和六年七月一日發行
第八卷第七號（毎月一回一日發行）
編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎
發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番
大阪市住吉區杭全町六〇三番地
事務所　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（函館）
石鏡（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

創作奬勵懸賞川柳

第三回募集の言葉

川柳の社會化運動を徹底させるため、本社は曩に創作奬勵の名に於て弘く社會より、より良き作家の、より良き作品の募集したところが五月號發表の如く多數の秀句佳吟を蒐め得たので更にその第三回を募集することにした。奮つて應募せられんことを切望する。

課題　「顔」

選者　橋本綠雨

賞

一等　金五圓　一名
二等　目覺時計　二名
三等　川柳雜誌（六ヶ月）　三名
佳作　若干名　記念品贈呈

句數　「一枚五句以内（但一人にて幾枚投するも可）

用紙　「川柳雜誌」六月號より毎號刷込みの投句用紙に限る

締切　昭和六年八月五日限

發表　昭和六年九月號（九月一日發行）誌上

投句所　大阪市住吉區杭全町六〇三　川柳雜誌社内　創作奬勵懸賞川柳係宛

（切取線）

（切取線）

（内以句五數句）

住所

氏名

川柳雜誌（第三回）懸賞川柳投句用紙

（規定違反は没）

本社基金醵金者御芳名

醵金を拜受しました方々の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します。

（受附順）

金五圓也　關本　雅幽殿

金壹圓也　井原　鴉夫殿

金壹圓貳拾錢也　藤岡　櫻來殿

金貳圓也　福田　鶴峰殿

小計　九圓貳拾錢也

累計　金壹百四十六圓拾錢也

社告

本社基金募集

【川柳雜誌】が柳壇の力強い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、孜々として其標榜たる川柳の社會進出、質的向上、量的發展の大旆を掲げつゝ力一ぱいに奮闘して來ましたことは諸君の夙に御承知の事と存じます。これと申しますのも、わが社の主義主張に賛同され、直接間接　大なる御聲援と御助勢を頂きました皆様御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。今や多幸なるべき辛未柳壇を迎へ、つら〳〵過去現在の實績を顧み、更に將來を深思しますときに、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大なる熱に燃えつゝあることは云ひましても物質上に恵まるゝことの薄い同人社友の意氣だけでは到底充分なる躍進的効果を擧げることは容易ならぬことゝ存じますごうしても川柳に熱を持たれを愛して下さる諸君の御力添へを仰いで時勢のテンポに副ふべく現在の狀態よりも、より以上に積極的な畫策の實現に努めなければならぬことを痛感するのであります。

就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分審議を重ねました結果、左記規定に依りまして各位に淨財の御喜捨を願ふことゝ致しました。何卒本社の微意のあるところを諒ぜられ本社關係の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年二月

川柳雜誌社

規

○一口一圓以上とし　幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。

○御送金は大阪市住吉區杭全町六〇三、川柳雜誌社事務所内、基金募集係宛になるべく振替（大阪七五〇五〇）が爲替でお願ひ致します。

○〆切期日は別段定めませぬがなるべく年中に一切づ打切りたいと思ひます。

○御芳名は誌上に錄し領收の證と致します。

○基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のことは御用捨願ひます。

○御喜捨は現在の社の經常費に充つるものではありません。將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。

川柳雜誌社關係の人々

（順はろい）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清一司　淺田篠原春雨　末弘嚴太郎　伊藤彦造　茨木奈緒美

客員

米村あん鳥　吉岡鳥平　田村孝之介　逢田銀波樓　安川久流美　前田雀郎　前田五健　柴谷柴舟　長山元水　中野柳陽　中野裸人　中澤濁水　中見光路　村松夢裡　木村晃卓　高橋かほる　主幹

社友

川村花菱　石川双葉子　西田艸樂　山本丹雨　白井梅里　朝田新水　池田雪峰　桑原京郎　松田多郎　水谷鮎美　酒井駒人　藤里好古　上三太郎　川村觀月　藤岡櫻果　日野華水　萬よし庄　片桐靈峰　福田鶴峰　須崎豆秋　杉谷專路　辻馬左　井二南　楊井　柳川洲馬　立井登美坊　永田里十九　越田久水　岩本素人　松丘町二　安井ひろし　橋本綠雨　中川めかく子　阿部閑生　阿形一杉　岩崎柳路　松盛琴人　長谷川一徹　安西杏三　北山悟郎　太田朝陽　麻生葭乃　伊藤愚陀　福田山雨樓　長谷川一徹　安西杏三　北山悟郎　太田朝陽　麻生葭乃　龜井花童子　住田亂耽

同人

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし

天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎

濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽

神戸支部（神戸市）幹事日野　華水

山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬

函館支部（函館市）幹事龜井　花童子

高知支部（高知市）幹事中澤　濁水

梅田支部（大阪市）幹事川村　觀月

螢ヶ池支部（大阪府）幹事茨木　奈緒美

金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子

大島濤明　伊藤綠之助　田三面子　生田翠夢　岡崎桂枝　上野錦水　村松夢裡　中見光路　木村晃卓　高橋かほる　竹内多聞　主幹

遊支部（和歌山）幹事辻　左馬

簸川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助

豐橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里

平壤支部（神奈川）幹事酒井　駒人

郡古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穗

京都支部（京都市）幹事桑原　京郎

鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲

別府支部（別府市）幹事木村　晃卓

堺支部（堺市）幹事友淵　貴山

松山支部（松山市）幹事三好　計加

守口支部（大阪府）幹事朝田　新水

御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角

高岡支部（富山縣）幹事越田　久水

天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋

平野支部（大阪市）幹事藤岡　櫻果

鶴町支部（大阪市）幹事關本　雅幽

小松支部（石川縣）幹事上野　錦水

高知第二支部（高知縣）長山　元水

御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二一番

暑中見舞の廣告を募る……

奮って申込まれたし

雜誌の上で句や文章を見て、風交を深めたいと思つても肝腎の住所氏名が分らない爲めに、文通さへも出來ないといふ憾みがあるので、川柳家各位の住所氏名を一度に知る便宜はないであらうかとの讀者諸彦の御希望に依り、從來新年と暑中に柳友各位の名刺廣告を載せて來ました本年も左の便法を設けて廣告を掲載することにしました、どうか奮つて御申込を願ひます。一人でも多く掲載することがこの趣旨にもそふ譯ですから、特に各位の御賛同を切望いたします

◇一口金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。

◇申込期限　七月十日迄

大阪市住吉區杭全町六〇三

事務所　川柳雜誌社

電話天王寺一一六七番
振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替御利用の上前金に願ひます（三錢以下の切手代用でも差支へありません）

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさはしい簡素な裝幀に出來ました。

第一卷　第二卷　各金五圓也
第三卷　第四卷　各金參圓也
第六卷　第七卷　各金參圓也
當分第五卷に限り

特價（合本）金壹圓五拾錢

各送料十八錢

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで各一部金拾錢

第四十八號より第八十三號迄各一部金貳拾錢

（但し一號九號十二號廿一號廿五號卅六號卅七號はありません）

川柳雜誌社事務所

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出來ました。左の價格でお頒ち致します。此用箋を御使用を願ひます。

五〇枚綴二冊價金拾二錢（送料共）

◇御申込は本社事務所宛（切手代用可）

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘

嘉納合名會社釀

アサヒビール
ポンシントロン
清涼飲料
大日本麦酒株式會社

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和六年六月廿五日印刷納本　昭和六年七月一日發行

川柳雜誌

（第九十號）

定價 金三拾錢

草薙金四郎先生著〔最新刊〕

川柳辭典

四六版二五〇頁・ボブリン裝幀・箱入全一册　定價一圓五十錢　送料十二錢

川柳用語を解してよく川柳の妙味を味はんとせばまづ本書によれ

●本書は、川柳初學入門者の爲めにその手引ともなり、師友ともならん事を目的とせるものなり。

●語彙は主として國語辭典にもれたものを集めたものであるが特に川柳に密接な關係のある語は之を採錄した。

●配列は五十音順により、引例の文辭語法については極めて原文通りに從ふ事とした。

●引用の柳句中に於いて、略解したものあるは、之を初學入門の參考に供せんとしたものである。

大阪市南區東清水町
駸々堂書店發行
振替大阪一〇三五番